第８０号

会　報

一般社団法人　函館文化会

〒042-0955　函館市高丘町51番１号
学校法人野又学園 函館大学内
電話・FAX　(0138) ５７－１１７５
E-mail　bunkakai@host.or.jp
URL　http://hakodate-bunkakai.com/

平成30年度定時総会を開催　～金山正智氏を会長に再任～

一般社団法人函館文化会では、平成30年度定時総会を５月24日(木)午後１時30分からフォーポイントバイシェラトン函館において、会員総数124名のうち102名（委任状出席を含む）が出席し開催、提出された議案・報告は全て原案のとおり承認・了承・選任し、無事終了いたしました。
以下、 定時総会の内容について、その概要をお知らせいたします。

定時総会は、金山正智会長の挨拶の後、定款の定めにより会長が議長となり議事に入りました。
今定時総会に付議された議案・報告は
議案第１　平成29年度事業報告について
議案第２　平成29年度収支決算及び監査報告について
議案第３　役員（理事、監事）の選任について
報告第１　平成29年度収支補正予算について
報告第２　平成30年度事業計画について
報告第３　平成30年度収支予算について
報告第４　「講演会」の開催について
の７件で、議案第１、議案第２及び報告第１は関連があることから事務局から一括して説明、次いで監事から５月18

（↗次のページに）

函館文化会　会報　第80号　目次

平成30年度定時総会を開催 ～会長に金山正智氏を再任～ …… 1
平成30年函館文化会講演会案内 ～函館は文化の十字路～ …… 2
ふるさと　会　長　金山　正智 …… 3
函館文化会役員名簿（平成30年度定時総会選任） …… 3
“「神山茂賞」を語る集い”を開催 …… 4
“「神山茂賞」を語る集い”記念講演
父・神山茂を語る　神山　茂郎 …… 4
「神山茂賞」を振り返って　安東　璋二 …… 6
「神山茂賞」受賞者からの言葉 …… 8
神山茂賞受賞者を称えて　受賞者の事績を紹介 …… 8
神山茂氏プロフィール …… 11
函館文化会講演会
平成29年度講演会・講演録
「映画の街・函館」　函館市民映画館シネマアイリス代表　菅原　和博 …… 12
函館文化会・市民公開講座
第４回　箱館・洋楽アラカルト　函館市文化・スポーツ振興財団理事長　佐々木　茂 …… 16
第５回　函館の町並みは誰がつくったか　日本建築学会会員・元町倶楽部会員　山本　真也 …… 19
卓話　第15回　三味線人生よもやま話　三味線奏者　杵屋勝幸恵 …… 22
函館文化会会員の募集・助成制度 …… 24
特集　函館の歴史と文化を語り継ぐ③
～テーマ「大門・松風町」～
「大門・松風町」まちの移り変わり　辻　喜久子 …… 25
懐かしき「大門」への思い　菅野　剛造 …… 27
永遠の大門派　小林　裕幸 …… 28
時のうつろい　今井　由治 …… 30
朝市界隈に暮らして　山田　涼子 …… 31
大門通りの思い出　能登谷　公 …… 32
「大門・松風町」の想いを短歌に綴る　齊藤　修三 …… 34
函館文化会ホームページ・ブログの開設について …… 35
特別寄稿　大沼電鉄物語　佐野　史人 …… 36
函館文化会「会報」、80号を迎える …… 38
会務報告　平成29年度事業報告・収支決算 …… 39
函館文化会会員名簿（H30.10.１現在） …… 42
編集後記 …… 42

日実施した監査について「経理については正確かつ適正に行われており、また、事業も事業計画に基づき適正に行われていると認める」との監査結果の報告があり、審議の結果、いずれも満場一致で承認・了承されました。

なお、承認された平成29年度事業報告・収支決算については、別掲（39ページ）のとおりです。

また、去る３月20日の平成29年度第４回理事会で議決した平成30年度事業計画・収支予算について、報告第２及び報告第３として一括説明がありいずれも満場一致で了承されました。新年度の事業の主なものは、「神山茂賞の贈呈」を継続して実施、同日開催の「受賞者を祝う会」には多くの会員に参加を呼びかけ、会員交流の場にもすること、また、「函館文化会講演会」は、10月13日（土）函館市中央図書館で、北海道教育大学名誉教授の佐々木　馨氏を講師に「函館は文化の十字路」と題して開催予定、さらに３年目を迎える「市民公開講座」も郷土の歴史・文化に関する色々なジャンルの方々を講師に迎え、継続して実施することが報告されました。

次に、議案第３の役員の選任について、現役員が今定時総会をもって任期満了となることから、議長から指名された理事、監事候補者を順次諮りいずれも満場一致で選任に同意。新役員選任後、総会を休憩し理事会において会長等の互選が行われ、会長に金山正智理事を再選、以下新役員が別掲（３ページ）のとおり決定いたしました。

平成30年「函館文化会講演会」を開催します

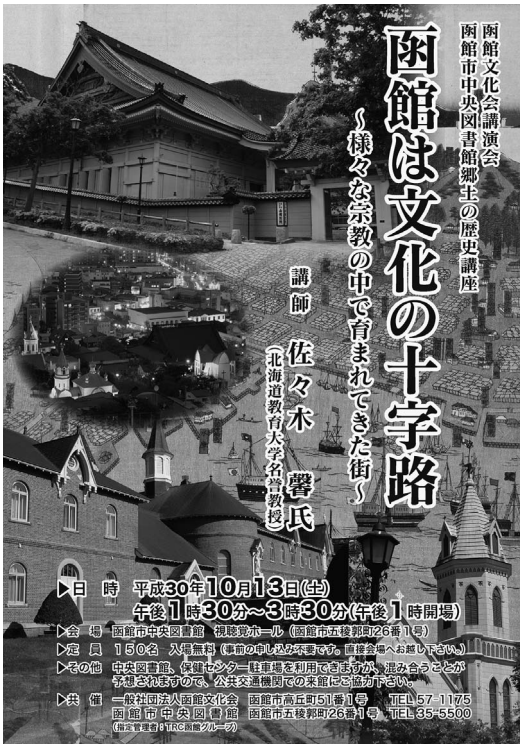
～ 演題は「函館は文化の十字路」～

今年度も函館市中央図書館との共催で「函館文化会講演会」を次のとおり開催いたします。今回は北海道教育大学名誉教授　佐々木　馨氏をお招きして「函館は文化の十字路」と題しての講演です。

ご承知のとおり「函館は宗教の博物館」と呼ばれるほど、函館の街にはさまざまな宗教が伝来してきました。これ自体驚きでありますが、視点を宗教の外延部分に移してみると、函館市内では幼稚園教育を始め中高等教育を担う学園で宗教を母胎としていることや箱館戦争の折、市立函館病院の創設者・高松凌雲が「日本赤十字精神」を高らかに唱えたのは高龍寺であったこと、また、函館盲聾学校の創設に深く関わった佐藤在寛がクリスチャンであったことに思いいたせば、函館の教育や医療福祉の分野にも宗教が陰に陽に関与してきたことが判ります。

副題の ～様々な宗教の中で育まれた街～ にあるように、函館の地に中世から現代に伝来してきた宗教が、市民の心の救いは当然のことながら、教育や医療福祉などの文化的な営みを育む芽ともなっておりました。このことを思うとき、「宗教の博物館」たる函館は、同時に「文化の十字路」であったのではないでしょうか。そのような経緯を佐々木先生に解説していただきます。

会員皆さんはもとより、市民の方々にもお声がけをいただき、多数聴講くださいますようお願いいたします。



●**開催日時**　平成30年10月13日（土）
午後１時30分開演（午後１時開場）
終了予定　午後３時30分

●**会　　場**　函館市中央図書館　視聴覚ホール
（函館市五稜郭町26－１）

※事前の申し込みは不要です。直接会場にお越し下さい。なお、中央図書館、保健センター駐車場を利用できますが、混雑することが予想されますので、公共交通機関でのご来館にご協力下さい。

●**演　　題**　「函館は文化の十字路」
～様々な宗教の中で育まれた街～

●**講　　師**　北海道教育大学名誉教授
佐々木　　馨　氏

会長挨拶

ふ る さ と

一般社団法人 函館文化会　会 長　　金 山 正 智

函館市文化・スポーツ振興財団が毎月発行している「ステップアップ」は、市民と文化・スポーツ活動をつなぐ情報紙として市民から重宝されているが、以前、この誌上に「私を育ててくれた函館の街」というコラム欄があった。経済、教育、文化など各界で活躍されている函館出身の方々が、少年時代を過ごした函館の姿をなつかしく回顧しながら、まちの風土が自身に及ぼしたものについて語るもので、私の大好きなページであった。

立教大学教授渡辺憲司氏は「孤独な決断の時函館を思う」として、「五稜郭戦争の志士たちを支えたのは、未来へ立ち向かった勇気である。函館は勇気の町と呼んでもいい。函館が私に与えてくれたのは挑戦と勇気である」と綴っている。また、北海道新聞社の間瀬達哉氏は、函館の本当の美しさの再発見を促しながら「東京へ行って一旗揚げるぞ、津軽海峡を見るたびにそう思う函館っ子は多いと思う。この進取の気性こそ函館人の特性」と述べている。

函館ゆかりの文筆家もふるさとについて様々語っている。亀井勝一郎氏が「自らの思想を形成していく過程において、函館のまちが及ぼした影響は決して小さいものではなかった」と述べていることや、芥川賞作家辻仁成氏が「函館には、美しさの中に、人々の根源的な霊的記憶を呼び覚ます信号のようなものが埋め込まれている気がしてならない」と記し、自身の感性や情感を育んだまちとして函館をとらえていることは、研究者の間でよく知られている。

関わって思い出すのは「函館讃歌」の作曲者広瀬量平氏のことである。10年前、広瀬氏が亡くなられた折、京都で行われた「偲ぶ会」で代表者として哲学者梅原猛氏がご挨拶に立たれた。広瀬氏のお人柄や仕事について諄々と語られた後突然、函館のことについてずいぶんと長くお話があった。そして、「広瀬君は函館をずっと愛していた。……思うに、函館のまちだから広瀬君の音楽が生まれたのではなかろうか」と述懐された。広瀬氏の仕事は、西欧音楽の先端を走る現代音楽と和の伝統的な音楽、双方の優れた追求から生まれものとお聞きしていたが、それは函館の地で少年期を過ごしたからこそ得られたもの、梅原氏はそう説明するのである。そして、「広瀬君は、亡くなる前に、函館の名誉市民になったことを大変喜んでいた。嬉しかったことだったと思います」と結ばれた。

「ふるさととしての函館」についてくどくど述べたが、もちろん、私は、函館だけがふるさととして他よりも優れた存在であると言うつもりはない。誰にとっても少年期は多感な時代であり、だからこそ、ふるさとで過ごした日々は郷土の風物と重なって心に印刻され、生涯にわたって、その人の生き方に大きく関わることになる。ふるさとはどの地であっても唯一無二のものとして人の心の成長に常に寄り添う存在であり、その優劣を問うのは愚である。それはそうではある。そうではあるが、しかし、同時に函館の風土であるからこそ刻み得た、また、函館の歴史や文化の土壌に身を置いたからこそ育まれた少年期の心の姿というものはあるように思われる。

まちの歴史をたどりながら函館の風土や文化を探っていく、そして、それがどう形づくられてきたのかを身近なところから解き明かしてみる、このことは函館人にとって十分価値のある作業に思えるのである。今年も函館文化会へのご支援・ご協力をお願い申し上げます。

一般社団法人　函館文化会　役員名簿

（平成30年５月24日選任）

○顧　問	安島　進	○理　事	繪面和子
	池見厚一㊨		小笠原　孝
○会　長	金山正智		小原幸男
○副会長	平原康宏		櫻井健治
○常務理事	叶　邦武		平　昭世
○理　事	池上信廣		田村志朗

○理　事	藤井方雄㊨
	藤井良江㊨
	三浦　稔
	若山　直
○監　事	向出清治
	山田涼子

※この度の役員改選で、池見厚一氏、小笠原愈氏が退任いたしました。永年のご尽力に感謝申し上げます。なお、池見氏はこれまで12期、24年にわたり副会長としてその職責を果たされましたが、引き続き「顧問」に就任しました。

より親しまれる「神山茂賞」を目指して
～“「神山茂賞」を語る集い”を開催～

函館文化会では、郷土の文化振興を図るため、平成元年に「神山茂賞」を創設し、これまで26人、８団体の方々を顕彰申し上げております。平成29年は、複数件の受賞候補者の推薦がありましたが、神山茂賞選考委員会において慎重審議の結果、残念ながら受賞該当者はなしということになりました。

従いまして、贈呈式は見送りとなりますが「神山茂賞」は制定後30年を迎えようとしている中で、神山氏が後世に伝えようとしたもの、また、これまで継承してきた精神を改めて振り返りながら「神山茂賞」の在り方を会員、関係者ともどもに考える機会として“「神山茂賞」を語る集い”を開催いたしました。集いは、故神山茂氏のご命日にあたる平成29年11月７日、五島軒本店でこれまでの受賞者を含め55人が出席して盛会裡に進められました。

第一部では、故神山茂氏次男　神山茂郎氏が父・神山茂氏の人となりや神山茂賞誕生の経緯について、また、神山茂賞選考委員長　安東璋二氏が歴代受賞者の事績を振り返っての講演を、また、第二部の懇親交歓会では既受賞者の中から第１回・平成元年の受賞者　井上能孝氏、平成14年受賞者　落合治彦氏、平成28年受賞者　森本貞子氏の３名の方々に「神山茂賞」をテーマにしてスピーチをいただきました。

この度の集いでは、郷土史研究がこれまで地域文化発展に果たしてきた役割の大きさ、また、その研究のために膨大な時間と労力を注ぎ込んでおられる方々に光をあててきた「神山茂賞」が、改めての理解と共感が深まったように感じました。これまでの歩みを振り返り、今後のより市民に親しまれる「神山茂賞」のあり方を考え、さらには、会員相互の懇親を深める、和やかで有意義なものとなりました。この集いをきっかけとして「神山茂賞」はもとより、郷土史研究への理解が一層広がっていくことを期待したいと思います。

第一部の、神山茂郎氏の「父・神山茂を語る」、安東璋二氏の「神山茂賞を振り返る」と題した講演の概要を紹介いたします。

“「神山茂賞」を語る集い”　講演

父・神山茂を語る

故・神山茂氏次男　**神　山　茂　郎**

函館文化会で「神山茂賞」を制定して30年、この間ほぼ毎年のように出席をさせていただきましたが、今日はこれまであまり話さなかった親爺とお付き合いのあった方の中から３、４人の方に絞り話をしたいと思い、この場に立たせていただきました。

本題に入る前に、函館文化会の方から「神山茂賞」誕生の経緯については「神山さんあんたが一番詳しいはずだか

ら話を聞かせて欲しい」と言われましたので、まず、私の記憶をたどりながら話をさせてもらいます。

今から52年前の昭和40年11月７日、父・神山茂は人見町の自宅で72年の生涯を終えました。１週間ほど経ってからでしょうか、北海道新聞に阿部たつを先生が「神山茂さんの遺業」と題した記事が掲載されました。その記事を読んで自分の知らなかった父の一面を垣間見たような、そして世間の皆様がこんなにも父の仕事を評価してくれていることを知り、驚きと、改めて父に対する尊敬の念を深めたものです。

その後、父が生涯かけた仕事を何らかの形で残してやりたいと思い、父と同じように父の住んでいた函館や道南で郷土の歴史の調査や研究をコツコツと続けている方が大勢いるはずだ、この方々の仕事や業績を世間に発表し評価して上げることが出来ないかと考えたものです。

さて、どなたと相談したらよいものかと考え、函館図書館創設者の岡田健蔵先生は郷土史研究の第一人者で父も尊敬していた方ですが、既に他界していたので、ご息女の岡田弘子さんに相談に参りました。

確か昭和63年の２月の寒い日だったと思います。当時駅前にあった五島軒のレストランに岡田弘子さんをお呼びして、食事をしながら私の意のあるところを話して是非「岡田・神山賞」を創設したいとお願いしたのですが、賞の創設には賛成してくれたが、弘子さんは「岡田」の名前は外して欲しいと固く辞退されたので「神山茂賞」とすることにしたのです。ただ、岡田弘子さんが何故その時「岡田」の名を入れるのを断ったのか、未だに詳しく聞いておりませんので、今日おいでになったら是非尋ねてみたいと思っております。

それから、「神山茂賞」の運営をどのようにするのか、岡田弘子さんは多忙の中色々と奔走していただき、最終的には函館文化会が引き受けてくださったというのが経緯でございます。先ほどの金山会長の話の中にもありましたが、郷土史研究に造詣の深い有識者の方々に選考をお願いし、その都度活発な議論が交わされて推薦された候補者の中から、賞の名に恥じない方々が受賞されております。これからも受賞される方が続くことを念じておりますが、皆様にもこの「神山茂賞」を愛し、育てていただきたいと思っております。

さて、本題に戻って親爺・神山茂の話ですが、私が中学二年生の時、親爺がリヤカーを借りてきました。親爺の部屋には図書館のように本がたくさんありまして、私に、「この本とこの本を積め」と言いました。マルクス資本解説、社会問題研究などみんな赤い字で書いてあり、当時赤本と言われていた本なんですね。１時間45分かけてリヤカーを引っ張り岡田健蔵先生のところへ届けるのですが、歩きながら親爺はこういう話をしました。「お前も知っていると思うが、憲兵隊の事務所の前を通る。これだけの赤本を持っていて、郷土史の研究と言うことで特別に許可をもらってはいるが、あちこち写真を撮っていればスパイと間違われるかも知れない。だから図書館に寄付をするんだ」と言う話をしました。岡田先生を尊敬していたからだと思います。

カールレイモンさんの最初のお店は函館駅前の真ん前にありましたが、昭和２、３年頃親爺と一緒にしょっちゅう行っていた記憶があります。親爺はカールレイモンさんからドイツ語を習い、親爺がカールレイモンさんに日本語を教えていました。親爺は語学が好きで、ロシア領事館の若い一等書記官からロシア語も勉強していましたので、親爺の書斎の本棚には日本語、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語の辞書が並べてありました。親爺は酒が好きでしたが酔った姿を私たちに見せたことはありませんでしたし、私が目にする親爺はいつも本を読んでいるか字を書いる姿以外はあまり記憶にないほどです。岩波書店の月刊誌「世界」を歩きながら読んでいました。カールレイモンさんとは奥様のコウさんが私の母と庁立高女で同窓だったというような縁もありお付き合いが続いたのです。

田辺三重松先生とは、先生のお宅が今の千代台町の電車道路の一つ裏通り、親爺は私を連れてしょっちゅう行きました。親爺は油絵が好きでしたので、多分、田辺三重松先生から油絵を習っていたんだと思います。そんな縁で田辺三重松先生から油絵を何点か頂戴しましたが、今その絵は弥生小学校に寄付させていただいております。

五島軒の先代社長・若山徳次郎さんも郷土史の研究に熱心な方で、月に２、３度五島軒に呼ばれてお話ししていました。そのたびにお食事をご馳走になり、お土産までいただき、その帰り道親爺は、「五島軒の燗酒（かんざけ）は、

美味しいなあ、いつも同じ熱さで出してくれる」と話していたものです。

親爺がよく「勝てば官軍、負ければ賊軍」と言っていました。また、「来るものは拒まず去る者は追わず」を信条としていました。私が物事の途中からいい加減な仕事をすると「終わり悪ければ全てが悪くなってしまうんだ」と言って、頭を殴られたものです。そして、「終わりよければ全て善し」もよく言っていました。

私も善き終わり方になるよう、これから頑張っていきたいと思っています。どうもありがとうございました。

“「神山茂賞」を語る集い” 講演

「神山茂賞」を振り返って

神山茂賞選考委員長　安　東　璋　二

私は郷土史研究家としての神山茂さんのお名前は知っていましたが、専門的な関心を持って読んだり聞いたりしていたのかというとそんなこともありませんでしたので、函館文化会から神山茂賞選考委員の一人として声を掛けられるということは想像しておりませんでした。ただいま神山茂郎さんのお話にあった誕生の経緯などにもありましたように郷土史の分野だけでなく、その外側の人もメンバーに含まれ選考委員会を構成するというお話しでした。

当時の委員には郷土史で活躍されていた須藤隆仙さんや、私の恩師の加賀榮治先生など錚々たる人たちがおりましたので、そのような方々を前にして私の存在も意味があるのかなあと思いながらも引き受けさせていただいわけでございます。しかし、いつの間にか押し出されるような形で座長を務めることになり、まとめ役というようなことで選考委員長という名前まで貰ってしまいました。数えてみましたら誕生以来30年、我ながら恐縮している次第です。その当時の委員も今では岡田弘子さんだけとなり、私がここまで生きながらえてきたということで、これまでの選考結果をふり返るという話をしなければならないという思いでこの場に立たせてもらいました。

これまでの神山茂賞受賞者の事績が資料（８ページ）として配られておりますが、その流れをザッと見てみたいと思います。第１回目の受賞者となった井上能孝さんは、函館英学事始めという函館に相応しいテーマを幕末、明治の初期の函館事情を函館に関わる外国の文書を翻訳されながら郷土史としてよくまとめておられました。選考経過も順調に進んだように記憶しています。同時に神山茂奨励賞を設ける必要があるだろうということで、それにぴったりの道南女性史研究会の活動がありました。道南女性史研究会としてもまだ活動初期の感じがしていましたけれどいろんな意味で神山茂賞としてアシストしたいということでめでたく第１回の神山茂賞正賞・奨励賞に相応しい対象を得て順調に船出したと思っております。

平成２年の冨原章さんは、かねてから函館水道史を研究されており、幕末から明治以降の函館事始めに相応しい研究内容に対しての受賞、５年の葉梨孝幸さんの乙部町史編纂へ関わる活動や檜山の史跡についての出版活動に対しての受賞は、函館だけでなく函館近郊の郷土史研究に関わる人たちも対象とする主旨に添うものでした。

平成６年は函館日米協会が「神山茂賞」初の団体受賞ですが、第１回受賞の井上能孝さんの研究に繋がる「箱館開化と米国領事」を出版した活動などを評価、10年の坂本龍三さんは、先ほど神山茂郎さんから、当初岡田・神山賞にしようという話があったけれど、岡田弘子さんが辞退されて神山茂賞になったという経緯をお話しされましたけれど、その岡田健蔵さんの評伝をまとめた仕事が評価されての受賞でした。

12年の新明謙治さんは、謡曲観世流の育成、指導にあたりながら、函館の謡曲の歴史、記録をまとめられたもので、函館にもこういう世界もあったことを気づかされました。17年には大野町文化財保護研究会と函館産業遺産研究会の２つの団体が受賞しましたが、こういう分野の活動が評価されたということも意義のあることだと思います。

21年には近江幸雄さんが郷土史の中の埋もれた歴史的事柄や人物を丹念に拾い出し積極的に示された活動が評価されての受賞でしたが、近江さんは以前に「神山茂奨励賞」を受賞しており、平成７年の道南女性史研究会、平成15年の小井田武さんも奨励賞から正賞を受賞しており、私共としてはこのように奨励賞を受賞した人や団体が正賞を取られるようになるのも望ましい賞のあり方ではないかと思います。

26年は中尾仁彦さんが奨励賞を受賞しました。中尾さんは熱心な地元の歴史研究者ですが、自ら歴史散歩の会を立ち上げられ、実際の函館の歴史的現場を丹念に調べられその成果を街歩きという形で市民に広く示して、市民に郷土史に対する興味を喚起されたというこれまでの神山茂賞になかったタイプの活動にも目を開かされた受賞で、神山茂賞の歩みとしては一つの新しい歩み方でした。

27年の松村隆さん、28年の森本貞子さんの受賞は神山茂賞をふり返ったときに非常に印象的な受賞であったと思います。松村さんは江差では誰一人知らない人がいないくらい幅広く文化活動をしており、特に江差追分、姥神大神宮など江差という町の持っている歴史、文化の奥行きの深さを全国的に広めただけでなく、江差町の文化活動全般に貢献された、もっと以前に受賞されてもおかしくなかったという方でした。28年の森本さんは今までになく知名度は抜群で「女の海溝」で描いたトネ・ミルンの青春や秦冬子を描いた「冬の家」など優れたノンフィクションの文学作品として評価を得ていた方が、神山茂賞を受賞されたことは神山茂賞にとって画期的だったと思います。

私はこの神山茂賞の意義づけについて、函館という地域の歴史的特性、風土的特性そういう函館の郷土史というものを基本として考えると、函館の町が持っているが他の都市や地域にない地域的、歴史的特性というものを象徴化したもの、一つの例として上げれば森本さんの仕事だったのではないかと思います。森本さんの書かれたものはノンフィクション作品ですが、例えば島崎藤村の妻冬子の生涯を克明に辿って説得力のある作品に仕上げられました。文献、資料を見事に統一して一つの物語にしています。それは立派な歴史資料になるんですね。藤村学会が函館で開かれ「函館の近代文学」について話してくれと頼まれてその学会に参加したとき、初めて島崎藤村と函館の関係が藤村研究の中で非常に重く受け止められており、注目されていたのが森本さんの「冬の家」だと言うことに気づかされたのです。その森本さんが28年の神山茂賞を受賞されたのは非常に意義深いと思います。

この神山茂賞の意義は、神山茂さんという人の存在の実質的な重さ深さです。神山茂さんの事績の幅の広さは「函館市教育史年表」でもともと注目されていた方ですが、46巻に及ぶ函館市の基礎資料となる「函館市史資料集」というものを作っております。長年の神山茂賞の歩みの中での受賞者の多岐多様な分野の広さ、奥行きの深さが神山茂さんの事績に繋がるんですね。もう一つ神山茂さんが単なる郷土史研究家にとどまらせない奥行きと懐の深さ、そういう懐の深さと、神山茂さんとか岡田健蔵さんというような人の函館が元々持っている郷土史としての世界の奥行きの深さという二つがあって神山茂賞になっているのだと思います。

全国的に見てもいろんな賞がありますけれど、管見ですが神山茂という郷土史研究家の名前を冠した賞というのは他の地域にはないのではないかと思いますし、その「ない」と言うこと自体が神山茂賞の意義を表しているわけで、地元の人間ももう少しそのことに注目しないといけないと思います。神山茂さんは郷土史研究家というだけでなく例えばタウン誌の「函館百点」の創刊号からずっと函館に関する郷土史随筆を書いていますが、その一方で、地域の文化

と文学の向上を目的とした函館文芸協会の設立に関与し、その会長に推されるなど幅広い文化活動の実績者でもありました。そこにあるのは、函館の類のない歴史的特性を世に知らしめたいという深い郷土愛であったと思われます。

重なりますが、神山茂賞の持つ意味を考えるとき、神山茂さんのお仕事の懐深さ、広さはつまり函館という日本でも独自の歴史的風土の持つ懐の広さであることを考えぬ訳にはいきません。そのことを改めて考えさせてくれたのは、昨年の森本貞子さんの受賞でありました。神山茂賞、奨励賞を受賞された皆様に改めて敬意を表するとともに、現在、函館、道南の郷土史の調査研究に係わっている方々の順調な活動に期待し、また、なによりも郷土函館の歴史と文化を育むための神山茂賞、その火を絶やすことのないよう、今後とも函館文化会には頑張って欲しいと願っております。

“「神山茂賞」を語る集い” 交歓会・スピーチ

「神山茂賞」受賞者からの言葉

“「神山茂賞」を語る集い”第二部の交歓会では、出席されたこれまでの受賞者の中から３人に「神山茂賞」をテーマにスピーチをお願いいたしました。スピーチでは、「地域にとって郷土史研究の必要性と郷土史研究者の対する地域の理解を故・神山茂氏が求めていたものではないか。今、その役割を"神山茂賞"が担っている」などの話しをされておりました。

平成元年受賞者　井上能孝氏

平成14年受賞者　落合治彦氏

平成28年受賞者　森本貞子氏

神山茂賞受賞者を称えて

～ これまでの受賞者の事績を紹介 ～

「神山茂賞」は、函館文化会が郷土の文化振興のために取り組んでいる郷土史研究奨励事業の一つで、平成元年に創設され、これまで「神山茂賞」は19人、５団体、「神山茂奨励賞」が７人、３団体に贈呈、顕彰しております。

「神山茂賞」制定30年を迎え、平成元年の創設からのこれまでの受賞者の皆さんの事績を紹介いたします。なお、各事績はそれぞれ受賞時の内容です。（敬称は略させていただきました。）

平成元年　神山茂賞　　井　上　能　孝

古文書や各種文献等の調査、また領事館関連など外国語史料の翻訳を通して、黒船来航から幕末・明治初期にかけて函館で英学がどのように興隆したかを解明した

平成元年　神山茂奨励賞　　道南女性史研究会

道南の女性史を学ぼうと昭和51年に発足。これまでに６冊の「道南女性史研究」誌を発行、取りあげた女性は100人にも及びその生きざまを記録にとどめ続けている

平成２年　神山茂賞　　冨　原　　章

函館の上水道について、その創設に至る史実や災害などの模様、上水道を願う市民の様子などを長年月にわたって克明に調査、編纂した「函館水道創設事業史料」を出版した

平成２年　神山茂奨励賞　　長　川　清　悦

埋もれていた生活用具や郷土史資料５千点を集め私設「七飯郷土資料館」を開設、その後町施設へ寄託し将来の研究者の途を開き、また郷土史に係る多くの研究、発表をしている

平成３年　神山茂奨励賞
元町倶楽部・函館の色彩文化を考える会

函館地区に残る歴史的建造物の下見坂のペンキ色彩を「こすり出し」という平易な手法で、時代と世相を色彩の面からあぶり出し、まちの歴史と文化を解き明かした

平成４年　神山茂賞　　中　村　正　勝

全国各地で調査、収集した膨大な資料をもとに編纂委員会委員長として「渡島地区特定郵便局長会百年史」編纂したほか、多数の研究著書を刊行している

平成４年　神山茂奨励賞　　小井田　　武

「森町史」の編纂に携わるとともに、森町の歴史上の事件等の著書や文献研究を発表し、地方郷土史の発掘に努力、地方文化を後世に伝える役割を果たしている

平成５年　神山茂賞　　葉　梨　孝　幸

古老からの聞き取り調査や研究に力を注ぎ、「檜山の史跡と伝説」を自費出版したほか、出版物も多く、更に私設乙部町史研究室を開設、檜山地方の郷土史研究に光明を灯した

平成５年　神山茂奨励賞　　亀 田 史 談 会

郷土の姿を後世に残すべく、各町会の委嘱を受け「神山300年誌」「赤川町誌」「亀田川の史跡案内」「桔梗町誌」「鍛冶町誌」等の編纂に協力、町の歴史の掘り起こしを図った

平成６年　神山茂賞　　浅　利　政　俊

第２次世界大戦末期の函館市と近郊町村間にあった学童集団疎開について、疎開先の現地調査や体験者の証言資料を発掘のうえ「証言日本最後の集団学童疎開」を出版した

平成６年　神山茂賞　　函 館 日 米 協 会

米国国立文書館所蔵の公文書記録を入手し調査研究、困難なマイクロフィルムからの解読作業を進め、翻訳や時代背景を調査のうえ「箱館開化と米国領事」を出版した

平成６年　神山茂奨励賞　　竹　田　又　平

日本写真発祥の地函館において、写真器材や資料収集を続け、写真文化の向上等に努めるとともに、北海道写真史料保存会を結成し「函館市写真歴史館」の設立に尽くした

平成７年　神山茂賞　　道南女性史研究会

道南の女性史作りのため、インタビューなど聴き取り取材や綿密に調査のうえ、「道南女性史研究」を継続刊行するほか、単行本「道南の女たち」を出版した

平成８年　神山茂賞　　永　田　敏　雄

道南の石碑を訪ね歩き、碑文解読の研究に取り組み、碑文の拓本と翻刻、書き下し文を収録のうえ、建立年や経緯など歴史的意義の解説を加えた「道南の碑」を出版した

平成９年　神山茂賞　　富　岡　由　夫

明治・大正・昭和初期における函館の造船や機械製造業など地場産業の調査研究を続け、「函館機械工業史」等をまとめたほか、「函館産業遺産研究会」を設立した

平成10年　神山茂賞　　坂　本　龍　三

函館図書館の設立と運営に情熱を注いだ創設者岡田健蔵の評伝「岡田健蔵伝」を刊行するほか、石川啄木に関する資料を調査のうえ、「琢木文庫資料目録」を作成した

平成11年　神山茂賞　　荒　木　恵　吾

近隣町村史の編纂に精力的に携わり、「南茅部町史」「鹿部町史」「砂原町史」等を編纂し、更に「木直二百年史」「私の戦争史」等を刊行したほか、後進の育成に力を注いだ

平成12年　神山茂賞　　新　明　謙　治

謡曲の史料収集、研究を重ね、函館謡曲に関し歴史記録となる「花蹊」を刊行したほか、観世流の「新謡会」を主宰し、後進の育成、指導に当たっている

平成13年　該当者なし

平成14年　神山茂賞　　大　淵　玄　一

郷土の自然科学分野の研究に努め、「函館の自然地理」「函館の歴史」などを出版するとともに、社会科資料「郷土函館」をまとめ、社会科教育の充実に尽くした

平成14年　神山茂賞　　落　合　治　彦

「上磯地方史研究会」「函館の歴史風土を守る会」など様々な活動と郷土史に関する研究に努め、「上磯町史・年表」の編纂に携わるほか、資料の発掘や公開に取り組んだ

平成15年　神山茂賞　　小井田　　武

「森町史」の編纂に携わるほか、「森町大火災害史」「森町の歴史散歩」「アイヌ墳墓盗掘事件」など多くの著作を執筆、更に「北海道駒ケ岳噴火誌」を刊行した

平成15年　神山茂奨励賞　　近　江　幸　雄

特に道南の人物に関する研究を続け、「函館人物誌」「函館郷土覚え書」等の著書を刊行し、また、新聞紙上への連載、各種講演など郷土史を伝える活動に努めている

平成16年　神山茂賞　　高　木　崇世芝

道南の郷土史研究に取り組むとともに、江戸期以降の北海道古地図研究や史料収集を続け、北方図に関する多くの著書、論文を発表したほか、講演活動にも努めている

平成17年　神山茂賞　大野町文化財保護研究会

地域の文化財や史跡・史料の研究調査、保存はもとより、各種講演会や見学会の開催、また「郷土史かるた」や箱館戦争をテーマとした紙芝居の制作など幅広く活動している

平成17年　神山茂賞　　函館産業遺産研究会

産業遺産を実証的に調査、研究し、発表会や見学会を開催するほか、報告書では、「北の船大工道具」「函館要塞の研究調査」等、研究誌では「函館の産業遺産」を刊行した

平成18年　神山茂賞　　山　崎　栄　作

道南、北海道の歴史資料の調査研究を続けるなか、函館中央図書館所蔵の「東遊奇勝（全13巻）」を復刻発行したほか、「陸奥紀行」「東案内記」「箱館日記」も復刻出版した

平成19年　神山茂賞　　近　堂　俊　行

「恵山町史」の編纂に携わり、完成させるとともに、児童向け歴史読本「ふるさと民話集」の発行や恵山町広報誌に「恵山むがしむがし」を長期に連載するなど郷土史の普及、啓発に尽力

平成20年　該当者なし

平成21年　神山茂賞　　近　江　幸　雄

郷土史の歴史の中に埋もれかねない幾多の事柄や人物に光を当て、これらを後世に伝えようと努め、市民に郷土史に対する興味や関心を呼び、郷土史を身近なものにした

平成22年　神山茂賞　　七飯町郷土史研究会

平成元年に郷土を育んだ歴史を学ぶため「七重学校」を開校、古文書講座や研究発表会を継続して開催し、これまで「研究会記念誌」や「郷土かるた」等郷土にかかる多くの出版物を発行

平成23年　該当者なし

平成24年　神山茂奨励賞　　桑　島　洋　一

長年にわたり写真史研究に取り組み、函館写真研究の第一人者として多くの研究発表があり、特に「地域史研究はこだて」に発表した「函館写真史・考」は高い評価を受けている

平成25年　神山茂奨励賞　　木　村　裕　俊

定年退職後郷土史の研究を本格的に取り組み、北海道でもっとも古いといわれる文献資料「新羅之記録」現代語訳は高い評価を得て、また、郷土史研究団体における研究発表を継続している

平成26年　神山茂奨励賞　　中　尾　仁　彦

平成20年「函館歴史散歩の会」を設立、爾来、主に函館西部地区を中心に名所、旧跡、文化、風土について調査を重ね、集積した郷土史研究の成果を現地で説明し、郷土への愛着心を喚起

平成27年　神山茂賞　　松　村　　隆

江差地方の歴史・文化・風土をテーマに写真展を続け、また、文芸誌「えさし草」の定期発刊を続けるなど郷土の歴史・文化を後世に伝える活動は、郷土史研究に大きな足跡を残している

平成28年　神山茂賞　　森　本　貞　子

文学作品として高い評価を得ている「女の海溝」や「冬の家」は、郷土史研究の立場からもこの作品に払われた資料収集・調査の膨大な努力とその成果が、郷土の歴史に対する関心を高めた

平成29年　該当者なし

「神山茂賞」受賞者に贈られるトロフィー「響き」

「神山茂賞」の受賞者には副賞として金属造形作家折原久左エ門氏製作のトロフィー「響」が贈られている。製作者の折原氏は、昭和６年山形県村山郡生まれ。金属造形界の重鎮で、昭和61年に道内在住者として初の日本芸術院賞を受賞、同年函館市文化賞受賞。東京教育大学（現筑波大学）卒、昭和37年から平成６年の退官まで北海道教育大学函館校で金属加工を教えていた。平成23年春瑞宝中授章を受章。なお、折原氏は、平成30年２月１日、86歳でご逝去されました。ご冥福をお祈りいたします。

神山　茂 氏プロフィール

「神山茂賞」制定由来の人である故・神山茂氏は、教育者として、また、郷土史家として郷土史の研究に精魂を打ち込んだ函館市史編さんの先覚者であります。「神山茂賞」制定30年を迎えるにあたり、改めてその人となりをご紹介いたします。（写真・資料　「函館郷土史家　神山茂の追憶」　神山茂郎編）

在りし日の神山茂

神山茂（こうやま　しげる）は明治26年１月15日、函館区東川町に生まれた。祖父は、白虎隊で有名な会津若松の士族であった。

明治44年３月、北海道庁立函館中学校（現中部高校）を卒業、そして翌明治45年３月、札幌師範学校第二部（現道教育大学札幌校）を卒業した。その年、函館区新川小学校訓導に就任し、大正９年３月、函館区弥生小学校訓導の任につく。神山茂が本格的に郷土史研究に取組むのは昭和10年、函館教育会長斉藤与一郎に「函館教育史年表」の作成を依頼されてからのことであった。この教育史年表は、二年有余の歳月を費やして昭和12年に単行本として刊行された。神山茂、四十代半ばであった。「函館教育史年表」は、単なる年表ではなく、豊富な「引用資料目録」が付されており、実に二百数十点にのぼる郷土史料で、後人の郷土史研究に裨益するものであった。この業績によって、郷土史家としての名声を博した。教育史年表は今なお不朽の労作として古書目録中に紙価を高めている。

神山茂は、郷土史研究の他にも趣味は広く、園芸、写真、油絵等いずれもその道に深く、また健脚家で、休日を利用してはよく山野を跋渉していた。

昭和15年６月30日、弥生小学校を依願退職し、以後郷土史研究に没頭する。数々の成果を世に発表したが、注目すべきものの一つに、「平田兵五郎伝」「漁業と堤清六」「高村善太郎伝」「相馬哲平伝」といったような、函館の財界人の伝記執筆がある。“これらの伝記には、よく函館の商業都市としての息吹が感じられて、全く函館人としての先生ならではの、丸みをおびた伝記編術の巧みさに敬服させられる”（須藤隆仙）。

業績でことに大きかったものに、「函館市史資料集」の執筆がある。これは市史各分野にわたる基礎資料を克明に筆写し、検討を加えたものである。10数冊にのぼる単行本の執筆の他にも昭和30年12月には、函館市史編さん委員の委嘱を受け、昭和40年５月までに46集に亙る函館市史資料集を刊行している。また公的な研究、編纂の他に、伝記等の依頼、「函館百点」（現タウン誌「街」）、郷土文芸誌「海峡」、函館教育会発行「函館の小学生」等への執筆、その他、函館郷土史研究における講演、ラジオ放送など、歴史を主体とした文化活動は、死去する直前まで続けられた。神山氏の仕事の重厚さがよく現れたものとして「函館教育史」がある。これは岡田弘子元市立函館図書館長が原稿を預託され、没後、函館文化会から刊行された。

昭和28年１１11月３日、郷土史家として函館文化賞（人文学部門）を受賞した。

昭和40年11月７日、郷土史研究にその半生を捧げた神山茂は人見町の自宅で逝去した。

平成元年、社団法人函館文化会は、神山茂の業績を称え、その名を残し、加えて後進の研究者を励ますために、「神山茂賞」を設定した。

「㈶函館市文化・スポーツ振興財団『ステップアップ』vol.68（1994.11）より」

平成29年度　函館文化会講演会

『映画の街・函館』を演題に開催されました

函館文化会では、平成29年10月14日（土）函館市中央図書館視聴覚ホールにおいて「函館文化会講演会」を開催いたしました。本講演会は、文化振興事業の一環として函館市中央図書館との共催で毎年行われているもので、この度は函館市民映画館シネマアイリス代表　菅原　和博氏を講師にお招きして「映画の街・函館」と題しての講演で、図書館視聴覚ホールがほぼ満席となる約130人の市民の方々に参加いただきました。

菅原氏は講演で、幼少の頃お母さんに連れられて映画館に足を運んだことから映画の魅力に取り付かれたが、函館の街から映画館が消えていくことにいたたまれず、市民に出資を呼びかけ市民映画館を作った経緯を話されておりました。

また、映画好きの究極の夢でもある映画作りも、函館出身の作家佐藤泰志の作品と出会い「これは神様から与えられたもの」と取り組んだという。函館発信で佐藤泰志原作の市民映画として４作目となる「きみの鳥はうたえる」は今秋に公開予定で、菅原氏は「これらの映画を通じて函館が全国に注目を浴び、地域に活力を与えられれば」と、函館を「映画の街」にする夢を抱き続けていきたいと話し、来場された皆さんも、菅原氏の話に引き込まれるように聞き入っている様子でした。

なお、今回の菅原氏の講演内容については、要約されたものになりますが纏めていただきました。今一度講演会当時を思い起こし、ご一読いただければと存じます。

平成29年講演会（平成29年10月14日）

映画の街・函館

函館市民映画館シネマアイリス代表　**菅　原　和　博**

私が東京に行って函館に戻ってきたのは25歳の時です。そして喫茶店を始めました。自分の喫茶店で自主映画と呼ばれる学生が作った映画を上映していましたが、その後そういう自主映画の上映会を映画館以外のところでもやり始めました。明治館、酒屋さんの二階、あうん堂ホールなどいろんなところで出張上映という形でやりました。そのうち主に巴座の二階にトムホールという映画館がありましたが、そこで年に何回か函館では見られないような作品、主にヨーロッパ、アジアの映画を一日だけ上映するということをやっていました。

1980年代に入ってバブルに近づきますけど、今まで輸入されなかったような年に５～６本ぐらいしか作られないような国からも映画好きの方が配給会社を作って輸入して映画館で上映されるようになったのです。そのような映画館は東京には沢山ありましたが「そんな映画館を函館でも作れるといいなあ」というある種夢のような話をしていたのです。そんな時にそれまで上映会をやっていた巴座が閉館

するということになり、「自分たちが映画を上映するホームグランドが無くなってしまう。これは困ったなあ」と思いながらも、これは「映画館を作るチャンスかも知れない」と考えたのでした。

映画館ってどうやって作るのか？どれくらいお金がかかるのか？興味もあって話を札幌のシアターキノの支配人に聞きにいったところ、「家一軒くらいで出来る」という話でした。映画館というものが費用的にはなんとなく目の前に見えてきたような気がしました。「もしかしたら、映画館が出来るかもしれない」ということで自主上映をやっていた仲間達と共に映画の上映会をする度に募金を呼びかけ、また、様々な形で寄付金を市民から募ったところ500名くらいの方から700万円近いお金が半年間で寄せられたのです。それに気をよくして更にさまざまな形の協力を受けて、1996年５月14日に「スモーク」（とても好きな映画で）という映画でシネマアイリスはオープンしました。

オープンしたとき、私は市民の力で作ったという盛り上がりもあったので観客は溢れるくらい入場するだろうと期待をしていたのですが、意外に人が少なかったのです。結局、家一軒分では足りなくて車庫と乗用車１台分ほどの借金が出来てしまい、テープカットの時「この先どうなっていくんだろう」とちょっと不安を感じながら飛んでいく風船を見送った思い出があります。

自主映画をやっていたときは一日で1,000人もの観客が来てくれたのに、映画館で２週間もやっているのに200人くらいしか来ないのです。これはどうなっているのかということで、徐々にいろいろな重石がさらに肩にのし掛かってくるのです。

オープンして１年半くらいしてからでしょうか、日本を賑わしたというか世界を賑わし大ヒットした「タイタニック」という映画が、東宝のお正月映画としてほぼ半年近く上映しておりました。いよいよ終わるというときどういうわけか閃いて「この映画をシネマアイリスでやろうかなあー」というふうに思ったのです。一度上映した映画、しかも半年近くもやっていてもうお客さんもいないのでないかと思ったのですが、「まずは、やろう!!」ということで配給会社と交渉を始めました。しかし、何度交渉に行っても断られ、めげずに交渉に出かけては断られ「しつこいなお前は!!」

函館市民映画館　シネマアイリス

と言われるくらい出向きましたが、その誠意がとどいたのか最終的に借りることができました。正直高い金額だったのですが「よし!!これにかけよう」との思いで、タイタニックを上映しました。そうしたら映画って不思議ですね。連日超満員で、71席の映画館にもう入りきらないというぐらい続々と観客が入ってくれたのです。半年以上も大きな映画館でやっていたのに、まだ見ていない人がいたのだなあ…いや、見ていなのではなくリピーターなのです。訊いてみるとこの映画は２～３回はザラで、10回以上見ている人もいました。映画「タイタニック」は当時の興行収入の１位。沈みかけていたシネマアイリスが、豪華客船が沈む「タイタニック」という映画で浮上したということです。その後はすごく成績が良いわけでもなく、また、それほど悪いこともなくといった感じで、平穏に映画館経営を続けていました。

2008年です。佐藤泰志作品集がクレインという東京・吉祥寺にあるご夫婦でやっている小さな出版社から出版されました。この小説を知人から、私が佐藤泰志の名前は知っていたけど読んだことがないと云うことでいただきました。なかなか読めずにいたのですけど、最初だけでもととりあえず読むかと最初のページを開くと、「海炭市叙景」というタイトルが目に飛び込みました。「海炭市…」「何処にある地名かな、これは？」と思い、「叙景？叙情と言う言葉は聞くけど叙景という言葉はあまり聞いたことがないなー」などと思いながら、ページをめくってみたのです。読み進めていくと函館山が出て来て「これ函館の町のことじゃないの？」ってちょっと驚きました。と、その夜に18編全部を読んでしまい気がついたら白々と夜が明けかけていました。そして、読み直しながら「これをどうやって映画に出

来るかなあ」と考えていたのです。

映画館経営をしていて、低予算の独立経営の映画作りというのが苛酷でお金にならなくて報われないということを体験的に知ってしまったんですね。ですから映画作りはやめておいた方がいいとずっと思っていましたが、しかし、この小説に出会って何か湧き出るものを感じてしまいました。「海炭市叙景」。もし私にたった一本映画を作るチャンスを神様から与えられたのならこれしかない、この「海炭市叙景」しかないんだろうなとも思ったのです。

もちろん自分一人では出来ないことは承知していたので、ここは映画館を作ったように市民の方々の力をお借りし、映画作りをするのが正しいのではないか考えました。まずは函館でずっと地道に佐藤泰志の随想録とか研究をなさっていた西堀茂樹さんにお会いするところから始めました。西堀さんが函館西高校で佐藤泰志の同期のみなさんに声をかけて下さり、市内で佐藤泰志の小説を愛読していた方々、主婦の方、会社員の方、学校の先生、自由業の方など本当にいろんな方が集まって自発的に「これは絶対に映画にしよう!!」ということで動いて下さいました。1,000万円以上のお金が寄せられ、それを元に実行委員が動き出しました。劇場映画は1,000万円では作れないのです。なんだかんだと最終的には3,500万円くらいはかかりました。

もちろん準備の段階からもそうだったのですが、撮影に入る段になるとその方達はみんな現場に来て下さって現場でのお手伝いをしてくださいました。２月から３月にかけてメチャクチャ寒い時に、函館山で初日の出を兄妹で見ると言う場面の撮影にはエキストラとして200人くらいの方に来ていただいたのですが、夜の０時から翌朝の10時まで函館山の山頂に「拉致」したといって良いかもしれませんね。

佐藤泰志作品第３作「オーバーフェンス」
Ⓒ HAKODATE CINEMA IRIS

当然のことながらこの時間は山麓駅へのロープウエイは動いていないので、帰れないのです。スタッフの皆さんが豚汁とかおにぎりなどを作ってエキストラの皆さんに振る舞う、そんな振る舞いがなにか一緒に映画を作っているんだぞという一体感を感じました。私からすると理想的な映画作りなんじゃないのかなと感じ、そのような場面も素晴らしい場面になっていました。

監督は帯広出身の熊切和義さんで、彼の方から「是非、僕にやらせて下さい」という話で、お金がまだ一銭も集まっていない段階で彼は監督を引き受けて下さいました。

「海炭市叙景」のお陰で映画祭というものも初めて体験させて貰い、東京国際映画祭、フランスの映画祭とかに呼ばれて参加出来ましたし、「海炭市叙景」は興行的にも大きな赤字を出さずに済み、作品評価としてはその年のいろいろな賞をいただきました。とくに一番大きかったのは渋谷にあるユーロスペースという劇場での初日の１回目の興業に沢山の方が入場されびっくりしました。東京の渋谷で函館のなんともうらぶれた映画をこんなにたくさんの若い人が見にきてくれたんだと感激しましたものです。

評価されて一番嬉しかったのは佐藤泰志の復権ということでしょうか。「海炭市叙景」の上映のタイミングで小学館、河出書房が文庫化してくれることになりました。佐藤泰志の小説が発刊され「海炭市叙景」は７万部売れたのです。若い人中心に佐藤泰志の作品がちょうど合致したのでしょうか。格差の問題とか貧困の問題、それだけじゃないと思うのですが、生きていく意味を問う作品だったからではないかと思います。

第二作を作ろうかという話になった…というより私が言い出したのですけど…。というのも「そこのみにて光かがやく」というのが実は一番映画になりやすいというとおかしいけれど、物語の設定、少ない登場人物、訴えようとするテーマ、これぞ私が70年代に見てきたアメリカンニューシネマとかＡＴＧ映画の世界に近かったのです。ところが、これを映画にするのに３年かかってしまいました。「こういうテーマは暗いからお客さんは入んないんじゃない？」ということで出資会社から良い返事を得られないのです。

送りつけた脚本を読んだ綾野剛さんから「これやりたいです」という返事をいただき綾野剛さんが出演することになってお金が集まりだして制作費が出来ました。監督を呉美保という女性監督に依頼して映画にしました。これは本当に素晴らしい映画に仕上がったと思います。

この映画をみて大勢の方が絶賛して下さいました。これもたくさん賞をいただきました。中でも私自身が中学生の時から愛読していた映画雑誌キネマ旬報でベスト１の作品賞を、そして綾野さんが主演男優賞を取れたことが凄く嬉しく、何度もこの映画はアンコール上映をしました。

函館でロケをするだいたいの映画は、函館にファンタジックで無国籍な世界観というのでしょうか、そういうものを求めて撮影される場合が多いと思うんですよ。ただ私たちの場合は函館発信映画と言うことで、函館の街に住んでいる人間が函館目線で描く佐藤泰志さんのドラマをやるということで、逆に他所の街の人たちに観光都市函館がこの暗さ、暗さという言葉で片付けちゃいけないかもしれないが、この寂れ感とでもいうんでしょうかそれが信じられないというようなことを言われたこともあります。朽ちていく魅力、とくに函館の場合はその朽ち加減がいいなぁーと思い、映画にとっても私たちが作る函館発信映画はその真の魅力を最大限に生かすという作りになっています。

この映画のお陰でまた映画祭に行くことができました。モントリオール映画祭というカナダで行われているのですけど呉美保監督が最優秀監督賞を受賞しました。海外の映画祭…私が行ったのは数度しかないのですが、映画を作っている人がものすごくリスペクトされているのです。監督であれ俳優であれ私らのようなプロデュース的な人間にしてもものすごく歓待され、映画を作っている人はアーティストなのだというふうな考え方をされているみたいで、そこがカルチャーショックを受けました。函館でも映画祭が長く続いておりますが、いずれはそういう映画祭になるといいなぁーと思っています。

「オーバーフェンス」という映画も作ったんですけど、これは前二作がちょっと重いというか佐藤泰志の全力投球の小説だったと思いますが、ライトな感じをねらったこの三作目はすごいキャスティングということもあって今までで一番お金がかかった映画になりました。

今年また映画を作りました。題名は「きみの鳥はうたえる」。佐藤泰志の最初に芥川賞候補になった作品です。佐藤さんの作品の私が好きな部分は若者達の目的のない漂う感じ、それは私自身にもそういう時代は長くありましたしすごくよくわかるのです。それが佐藤泰志の本質の大きなところだと思い、シネマアイリスの20周年記念映画ということで全力で作りました。撮影は６月下旬に終わっておりますが、一応12月くらいには音も入って完成して、来年のどこかのタイミングで外国の映画祭に出せたら良いなあと思っています。来年の今頃、９月か10月ぐらいの時期に、もちろんシネマアイリスで公開したいと思っています。

佐藤泰志の原作で４本もの映画が作れるなんて思ってもいませんでした。三部作ぐらいだったはずが４本ですからね。私も去年還暦を迎え、今年は腰を痛め、やはり60歳過ぎるといろんなことが起きるんだなあと感じておりますが、気力はまだ多少残っていると思っているので「きみの鳥はうたえる」が成功すれば、その資金を次の映画に使いたいと頭の片隅にあります。まだ佐藤泰志の作品には優れたものがあり、これも良いな、あれもいいなんて思っているので、是非実現させたいなんて考えております。またどなたかに映画を作りたいなという方がいれば、私の経験の中でお手伝いしたと思います。

こういう形で佐藤泰志の小説を映画化することによって函館の街がより注目され、地域に活力を与え、映画の街になっていってほしいし、ただのご当地映画でなくてクオリティーの高い後世に残る映画をできれば作り続け、そういう映画でシネマアイリスに賭けていきたいと思います。

函館市民映画館シネマアイリス開館20周年記念作品
「きみの鳥はうたえる」
Ⓒ HAKODATE CINEMA IRIS

函館文化会 市民公開講座

函館文化会では、郷土の歴史・文化などを学び、探究しながら、受け継がれてきた「郷土の文化」を後世に継承することを目的に「市民公開講座」を開講しております。

今年は、3月と8月に2回の「市民公開講座」を開催しましたが、いずれも予想を超える皆さんにお集まりいただき、講座を担当した講師の興味深い話しに耳を傾けられ好評を博しておりました。2回の市民公開講座の内容について、講演録で概要をまとめましたのでご紹介します。

第４回市民公開講座（平成30年３月20日）・函館市芸術ホール

箱館・洋楽アラカルト

公益財団法人 函館市文化・スポーツ振興財団理事長　佐々木　茂

最初に今日の講座の拠り所についてお話しさせていただきます。

25年前になりますが、函館の金森ホールで「洋学史再考　洋楽発祥の地としての函館」というセミナーが3日間にわたって行われました。私にとっては興奮の連続でした。例えば安田寛さんは、文部省唱歌が隠れた賛美歌として作られたことや神社の結婚式、学校での音楽の授業などはキリスト教にならって成立していることなど些かショッキングな事例がたくさん紹介されました。このセミナーの中で、日本近代洋楽史の第一人者・中村理平氏によって近代洋楽発祥の地は箱館であるという説が発表されたわけであります。さらに2001年、ペリー来航150年を記念して開催された「ペリー提督が箱館に運んできた音楽」では「ペリーが日本に運んできた音楽」の研究で知られる放送大学の笠原潔氏、米国ニューマン大学から声楽家でもある石田雪子先生ほか地元研究者の清水信勝先生、箱館英学研究の井上能孝先生等を招いてフォーラムを開催し、席上、ペリーが来航したときに箱館で演奏された音楽の実演も行いました。今日の講座ではこれら2つのイベントを通して明らかになった内容をもとに演奏を交えながらお話しを進めてまいりたいと思います。

日本と西洋音楽の新たな接触、それはペリー来航から始まったと言っても良いでしょう。「新たな」というのは16世紀に一旦、大量のキリスト教文化が日本に入っていたからです。ザビエルがキリスト教を伝えたのが1549年、徳川秀忠が全国の大名に禁教令を出したのが1612年。そして1637年島原の乱以降だんだん取り締まりが厳しくなってくるまでの半世紀を超える間、キリスト教文化を受容していたことになるわけです。好奇心の強い日本人です。その影響は想像するだけでおわかりいただけると思います。

1　ペリーが運んできた音楽

1853年7月、4隻の黒船が浦賀沖に姿を現しました。アメリカ合衆国東インド艦隊司令長官ペリーが率いる日本遠征艦隊の来航でした。ペリー艦隊の来航は、日本に開港をもたらし幕藩体制の崩壊のきっかけを作ったわけですが、それは同時に日本と西洋音楽との新たな接触を生み出す出来事でもありました。開国を促すアメリカ大統領の親書を手渡すためにペリーが久里浜に上陸すると、軍楽隊が《ヘイル・コロンビア》を演奏し、帰途少年鼓笛隊が《ヤンキー・ドゥードル（アルプス一万尺）》を演奏したと記録されています。

翌年、日本を再訪したペリーは日米和親条約を締結した後、開港予定地の下田と箱館の視察に向かい、1854年5月17日ペリーを乗せた蒸気船2隻が来箱したのです。箱館の

町民は艦上から聞こえてくる軍楽の響きを耳にしました。箱館町民が間近に直接西洋音楽を聴いたのは５月26日に行われた乗組員の葬儀の時だと思われます。遺体を乗せたボートは高龍寺の下の浜に着岸して、現在の外人墓地まで横笛（ファイフ）とドラムによって葬送行進が行われたとあります。このとき演奏された曲は、ヘンデルのオラトリオ「サウル」というアメリカ軍の公式の葬送行進曲だったと言うことがわかっています。箱館町民が最初に聞いた西洋音楽はヘンデルの曲だったのです。

５月29日にはペリーは松前藩士たちを艦に招いて交歓会を行いました。松前藩用人たちは饗宴に出席し乗組員たちが演じる、当時アメリカで大人気を博していたミンストレルショーを楽しみました。ミンストレルショーとは当時アメリカで大人気を博していた手や顔を黒塗りにして黒人に扮した芸人たちが黒人なまりで歌ったり踊ったりふざけたやりとりを交わすショーです。その予告プログラムが残っていて演奏されたと思われるほとんどの曲が突き止められています。注目されるのはフォスターの《主人は冷たい土の中に》です。この歌は、ペリーがアメリカを出発する直前に出版されたフォスターの最新作で、アメリカの最新流行歌曲がリアルタイムで箱館に運ばれてきたことになります。函館の近代洋楽史はここに始まったと言って良いでしょう。

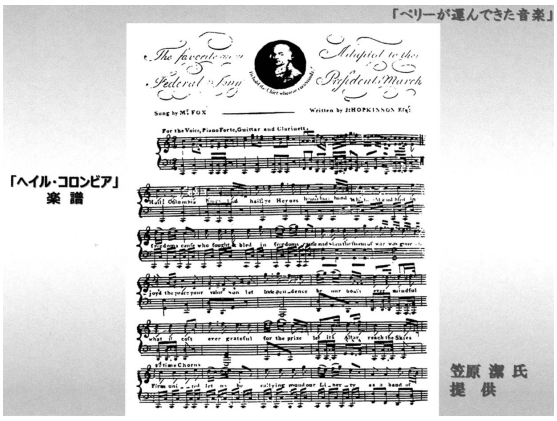
2　榎本軍の喇叭（ラッパ）

1867年（ペリー来航後14年）徳川幕府は外国からの脅威に備えるためにフランスから軍事顧問団を招き横浜で軍事訓練を開始します。総勢16名からなる第一次軍事顧問団ですが、その中で音楽史的に重要なのはギュティックという近衛猟歩兵大隊ラッパ伍長の存在です。相当数の伝習兵の中から第一期伝習生32名（町家の次男三男）を選びラッパの訓練を始めました。注目するのはこの人たちが五線楽譜で音楽教育を受けた最初の日本人であると思われることです。ギュティックの持参した喇叭教則本の内容は、田辺良輔と言う（当時、幕府の歩兵指図役頭取）人が翻訳した「喇叭符号」という楽譜に残されています。これらギュティックから伝習を受けた喇叭手の相当数が榎本武揚率いる幕府脱走軍として箱館に渡ったと考えられます。すべてがギュティックから直接伝習を受けたかどうかは断言できませんが、大鳥圭介の自伝【幕末実践史】に相当数の喇叭手が活躍したと書かれています。蝦夷平定の後、榎本武揚が打ち立てた新政府の誕生を祝って行われた祝賀パレードの先頭には鼓笛隊と共に喇叭手が誇らしげに演奏を繰り返しながら行進したことが書かれている資料があります。ギュティックが残した喇叭演奏技術は新政府に引き継がれ、重要科目として全国に普及していきました。

3　ハリストス正教会とその聖歌

1855年日露和親条約が結ばれ３年後1858年にイワン・ゴシュケヴィッチが初代の日本領事として函館に着任します。３年後ニコライが領事館付属の司祭職として来函、さらに３年後サルトフと言う人が聖歌の歌唱をリードする読経者として来日します。日本における正教会音楽の伝承はこのサルトフによって開始されたと言って良いと思います。平成５年の「洋楽史再考」というセミナーの中で、中村理平さんによって「1871年（明治４年）の時点で、読経者サルトフにより不完全ながら日本語による聖歌が編纂され儀式で使用されていたのは間違いない」と言う発表がありました。これまで最初の日本語賛美歌は1872年９月横浜でのプロテスタント宣教師会議でバラ神父夫妻によって「エス　ワレヲ愛シマス」と「ヨキ土地アリマス」が歌われたのが始まりとされていましたが、函館が一年早く近代日本における洋楽第一号となるわけです。「エス　ワレヲ愛シマス」（現行・主われを愛す）は日本中に広まり、当時賛美歌は

米兵葬列の図（市立函館中央図書館蔵）



「ヘイル・コロンビア」楽譜（笠原潔氏提供）

唯一西洋音楽の教科書として日本の童謡唱歌のお手本となりました。

さらに箱館の正教会では「1874年の時点で曲がりなりにも４部合唱で歌っていた」（中村理平）とされています。４部合唱は1879年に設置された音楽取調係（現在の東京芸術大学、東京音楽学校）で初めて取り入れられたとされており、当時の函館の先進地ぶりがしのばれます。

日本人最初の正教会受洗者で澤辺琢磨という人がいます。土佐から函館に流れてきて「箱館新明社」（現在の山上大神宮）の婿に入り宮司さんをしていた人です。まだキリスト教が認められていない明治元年に日本人で初めてニコライに洗礼を受けて信者になり、後に最初の日本人聖職者になります。この人の後々の証言によれば「最初に《「主憐れめ》の一句だけを日本の言葉にして、それからだんだんとロシア語（スラヴ語）を日本語に直して、日本の言葉で詠隊ができるようになり、そのうちにイヤコフさんが参いられて日本の言葉に譜をつけて本当の歌ができました。はじめの歌は《イゼ・ヘルビム》」という歌を日本の仮名で書いて歌いました。ロシアの軍艦の人が来て、私どもの歌を聴いて大いに笑ったそうです」と語った記録があります。イヤコフさんというのはサルトフの後に函館にやってきた詠隊教師ヤコフ・チハイさんのことで、箱館でヴァイオリンを用いて日本人にソルフェージュ教育をしました。後に日本人の音楽感覚の違いに気づき、日本の伝統的旋法を取り入れた聖歌を作曲して歌わせたという記録もあります。

この時代、日本人はドレミファソラシドの音感覚になれていないため歌っているうちに勝手に節が変わってしまう「歌いなまり現象」があります。澤辺が歌った聖歌を聴いた人の証言も残っています。「日本の謡曲の節が七分に義太夫が二分、後の一分が端唄のような節でなんとも形容できない面白い節なので参拝のロシア人たちがいたたまれず

石丸典子氏の歌唱で曲を紹介

その場を抜け出した」と伝えています。

とにもかくにも箱館に始まった日本ハリストス正教会は明治期の日本の音楽教育界を先導したことは間違いありません。明治５年に東京で詠隊学校を創り最高水準の音楽教育をして各地へ指導者を送り出したのです。

函館の元町というところは、世界のキリスト教史のなかでもきわめて特異な町です。２千年昔エレサレムに生まれたキリスト教が、一つはローマからカトリックとして、一つは英国から聖公会として、一つは正教会として北を経由して南下、一つは英国から米国を経由してメソジストとして、すなわち対照的な伝承を持つ４教派が百数十年昔、東洋の港町、箱館で相まみえたのです。このような土地は他にはないと思われます。

以上、平成８年に環境庁から「残したい日本の音100選」に選定されたハリストス正教会の鐘の音をききながら、わが国における洋楽導入の大きな柱である軍楽とキリスト教を取り上げて、当時の函館の先進性についてのお話しを終わらせて頂きます。

※文中に《　　》で記した曲は佐々木茂氏のピアノ演奏や函館芸術ホール館長石丸典子氏の歌唱がありましたが、他にも講座内容に即し数多くの演奏・歌唱があった。

次回の市民公開講座は３月を予定

第６回市民公開講座は、郷土の歴史をテーマに３月中旬に開講を予定しております。

開講日時、講座の内容、講師等決定次第会員皆様にお知らせいたします。ご期待ください。

第５回市民公開講座（平成30年８月27日）・カトリック元町教会

函館の町並みは誰がつくったか

日本建築学会会員・元町倶楽部会員　山　本　真　也

1　函館・西部地区の町並みは明るい

(1)　火除けの坂道

函館のまちの歴史は大火の歴史で、燃えないまちをつくることは、まちづくり上最大のテーマだった。

明治11年の大火は、弁天町一帯を焼失したが、当時の開拓使は迅速に街区改正を行った。その際、屈折した道路を直通させ、それまで４間（約７ｍ）程度しかなかった大通りの幅を12間（約22m）、小路は６間（約11m）以上に拡げた。

翌明治12年、当時の全戸数の約４割を焼失する大火がおこる。しかし、前年街区改正を行った地域は災禍をまぬがれ、防火上の効力を実証するかたちとなって、開拓使は再び街区改正を行う。この第二次街区改正は当時の市街地全域に及び、20間（約36m）幅の防火線街路として基坂と二十間坂を拡幅整備したほか、12～６間の街路が直交し、矩形の整然とした街区が誕生した。

この火除けとして街路を拡げる手法は、昭和９年の大火後の復興事業にもいかされ、20間（約36m）の護国神社坂から伸びるグリーンベルトや、それに直交するかたちで30間（約55m）の広路が整備される。その際にはもう一つ工夫が加えられ、広路が突き当る海岸線や交差部に、鉄筋コンクリート造の学校がグランドを中央にしてロの字状に配置される。つまり、グリーンベルトや広路は火除けであると同時に避難路で、それを通って突き当たると学校に辿り着き、その学校はコンクリートの壁で囲まれた避難所としてのグランドを用意しているということなのだ。

(2)　建築家たち

・小西朝次郎（明治12年～大正13年）

旧函館区公会堂（明治43年）の設計者。函館に生まれ、若くして軍に入り建築見習いとなる。要塞工事で監督者の指導のもとで技術を学び、その後函館鉄道の技術員を経て区役所に奉職。公会堂の設計に着手した明治41年は、29歳頃のことになる。まだ20代の区役所の職員、しかも独学で建築技術を学び、西洋を見聞してきたわけでもないのに、あの華麗で本格的な西洋建築を設計してしまうのである。

公会堂は、まだ若き小西朝次郎が、その若さとエネルギーを思う存分そそぎ込んだ作品に違いない。

・河村 伊蔵（慶応元年～昭和14年）

函館ハリストス正教会復活聖堂（大正５年）の設計者。愛知県で生まれ、明治16年に18歳でニコライから洗礼を受けてロシア正教に入信し、最後はニコライ堂の聖職者として亡くなっていて、その間正教会の中で活躍した人だ。明治40年頃から正教会の営繕課長のような役割を果たすようになり、自ら国内のいくつかの教会の設計まで手掛けるが、建築の教育を受けた形跡はないし、ロシアに渡った形跡もないので、どうやら見よう見真似であそこまでつくってしまったということになる。

ハリストス正教会竣工時、51歳。ハリストス正教会が見せる優雅で落ち着いた表情は、河村伊蔵がそれまで積み重ねてきた人生の経験と信仰の深さによるものかもしれない。

・小南 武一（明治30年～昭和51年）

昭和９年大火後の復興事業に大きく貢献した人。兵庫県に生まれ、大正９年に上京して苦学しながら建築を学び、大正12年から当時東京でも最大手の設計事務所、曽根中條建築事務所に勤務していた。その事務所に函館市長佐藤孝三郎から一通の手紙が届く。内容は、大正10年の大火を経験した函館市として学校の不燃化の必要を強く訴え、そのために不燃建築の経験者を派遣してほしいというものだった。大正14年春、その要請に応えて事務所から３人の職員が派遣されるが、その中に小南武一はいた。当時28歳。着任後、市立函館図書館本館や新川小学校をはじめとする学校不燃化に取り組んでいるなか昭和９年の大火を迎える。大火復興時には市の復興事務局の建築係長を兼務し、各学校のほか函館共愛会館、共愛会アパート、大火遭難記念慰霊堂など数多くの鉄筋コンクリート造の建物を手掛け、まちの不燃化に奔走してい

る。その後小南武一は、市の助役まで務めることになるが、昭和30年に助役を退任。間もなく自ら設計事務所を開設して、彩華デパートをはじめ共愛会病院など、多彩な作品を数多く残している。

大正10年の大火をきっかけに函館に迎えられた小南武一は、昭和９年の大火復興を経て、生涯函館のまちの不燃化につくしたことになる。

⑶　和洋折衷の建物たち（明治６年頃～昭和20年）

函館・西部地区の建物で圧倒的に多く見られるのは、一階が和風の造りで、二階外観に洋風の意匠を持った「上下和洋折衷様式」といわれる建物たちだ。

この様式はとても市民の支持を得た様式で、店舗のみならず戸建て住宅や長屋にいたるまで広く採用されたし、明治の初期から戦前まで幾度も大火を繰り返しながらも、その度により以上の普及率をもって取り入れられてきた。最も早く確認されているもので明治６年頃の写真に見られる店舗というから、開港して十数年後には早くも函館に登場している。

実はこの様式、道内各地でも見られるもので、函館だけにある様式とはいえないが、最も早い事例はやはり函館だし、こんなにも圧倒的支持を得て息長く採用され、現在に伝えられているのは函館くらいであって、長崎、神戸、横浜などでも見かけないから、やはり函館独特の様式といっていいものだろう。

何故このちょっと風変わりな様式が、函館において流行したかについては、函館で洋風建築技術を習得した大工たちによる仕事確保のための強力な勧誘説、洋風化政策を進める行政による指導説など諸説あるが、かなり生活に密着した必然性がなければここまで普及はしなかったように思う。つまり、洋風の窓は和風に比べて開口面積が小さいので、断熱材もなく建物の気密性が低かった時代に北海道の

講座の会場となったカトリック元町教会聖堂

１階が和風、２階が洋風の和洋折衷住宅が並ぶ町並み

冬の寒さをしのぐには、壁の多い洋風の形態のほうが有利だった。しかし、商いや生活の様式は従前のスタイルが引き継がれているので、一階の形態や内部の造りは旧来の様式が踏襲された。大筋そのようなことだったのだろう。

そして、新しい文化をいち早く受け入れてみせる函館の精神風土。一階は旧来の和風であるものの二階に洋風を載せると、遠見の概形は洋風に整えられる。見せ掛けといってしまえばそれまでだが、それが函館の一種のお洒落感覚だし開明性なのだ。

雛型本や自身の見聞と体験を頼りに創意工夫をこらしたであろう和洋折衷の建物たちや公会堂。試行錯誤を繰り返しながら辿り着いたであろうハリストス正教会や小南武一の鉄筋コンクリート造の建物たち。それらは函館のもつ開明性にも通じていて、まだ見ぬ異国への想いや未来への夢の結晶ではなかったかと思う。異国へ、未来へと向かう志向から産みだされたものは、やはり明るい表情をしている。

加えて、燃えないまちを目指して開拓使たちが整備した広幅員の坂道の開放感が、西部地区の空間を豊かにし、町並みを一層明るいものにしている。

２　まちは時代とともに表情を変える

もう一つ、西部地区の町並みの明るさの要因として、建物の色彩の明るさがある。

洋風や和洋折衷の建物たちの外壁に塗られるのが「ペンキ」。ペンキはペリーが運んできた材料だが、柿渋などの旧来の和風の塗材と違って、調合によって自由に色をつくることができる。そのペンキ色彩、現在はアイボリーやパステル調の色彩が多く見られてとても明るい時代になっているが、時代とともに大きく変化していることが、私たち元町倶楽部のいわゆる「こすり出し」調査によって分かっている。

・『港町・函館における色彩文化の研究』(1988～1991年)

この研究は、旧函館区公会堂の修復工事が竣工した時(1982年)の驚きが契機になっている。淡いピンクの外壁はブルーグレーに、縁取りも白色から黄色へと、いかにもハイカラな姿に変身していた。通常、外壁のペンキは幾度も塗り替えられるが、それまでのペンキの上に塗り重ねられていて、元のペンキは残っている。だとすると、それを擦れば元の色を見つけられる。それを民家レベルまで展開すれば、町並みの色彩の変遷が分かるはずだ。

「こすり出し」調査は、延べ85件について行った。詳細は省くが、その結果得られた「町並み色彩の変遷」の概要だけ述べよう。

第1期＝明治30年代～大正7年頃

洋風町家が普及する明治30年代から第一次世界大戦終了の頃まで。旧函館区公会堂の色彩は今見るとおりだが、あのような華やかな色彩は公共建築などに限られ、一般の建物には比較的明度の高い灰色が多い。「華やかな公共建築とグレー系の町家」といった町並みであったようだ。

第2期＝大正7年頃～昭和9年頃

第一次世界大戦後、ペンキ産業は需要の増加とともに国産化が大きく進展する。そのようななか、函館では多様な色彩が塗られた。緑、青、赤、茶、黄土など色相も多様だが、いずれも濃くて深い色合い(ダーク＆リッチ)で、全体にとてもシックな町並みだった。大正ロマンとともに「色彩の最盛期」と言えよう。

第3期＝昭和9年頃～昭和25年頃

昭和9年の大火後まもなく第二次世界大戦時の統制経済が進み、民間レベルでのペンキの入手が困難になる。迷彩が施されたり、クレオソートなどで間に合わせたりといった状況で、全体に「暗い時代」を迎える。

第4期＝昭和25年頃～昭和58年頃

塗料の統制解除以降、旧函館区公会堂が修復工事を終える頃までだが、「パステルカラーの流行」が特徴的な時期。終戦直後函館には多くの米国進駐軍がやってきたが、彼らが好んで使用したのがスタート。薄緑色やピンク系のパステルカラーが多くの建物に塗られた。

第5期＝昭和58年頃～現在

パステルカラーに加え、アイボリー系の外壁が多いが、外壁と柱型などを「めりはりのきいた塗分け」することによって、意匠部を強調しデザインを楽しむ傾向が見られるようになる。一方で、サイディングなど新建材の普及により、色彩選択の幅は狭くなっていると言えよう。

子供たちも参加したペンキ塗替え活動

・町並みペンキ塗替え活動(1990、1993～2012年)

ペンキ塗替え活動は、通算21年間、45件について行ってきた。当初は「こすり出し」の対象でもあった木造下見板張りの建物たちを元町周辺で、最後の7年間は「まちごと塗り替える」ことを意図し、谷地頭町の商店街を舞台とした。

北大や道教大函館校、北海学園大、未来大の大学生を中心に、函高専、函工高の生徒たち、そして小学生から一般市民まで、延べ1,220名もの参加を得ながら進めることができたが、学生たちにとっては自らの作業が直接まちに変化をもたらす貴重な体験的学習の場となり、建物所有者や市民にとっては、学生たちとの対話や交流の中から自分たちの地域に自覚と誇りを持ち、地域の価値の再発見へとつながった。実際に、学生たちによるペンキ塗替えを契機として、解体・売却を考えていた建物を維持・保全していくことにした建物所有者もおられる。

3　まちは市民のもの

都市は、人が集まることによってできる。また、人は住む場所を選択できる。そして、そこに住む人たちの様々な活動(企業活動を含む経済活動、文化活動など)の結果として都市は成り立っている。だから、もともと都市は市民のもので、まちは市民がつくるものだ。

そして町並みは、市民の様々な活動の結果、都市の表情としてある。そのまちで、どのように暮らすか、暮らしたいか。そうした市民の想いが、まちの表情として現れる。

市民の暮らしがまちの表情をつくる。そのまちの表情こそ「町並み」なのだ。

結びにこのような講演の機会と素晴らしい会場を用意いただいた函館文化会の皆様と、急な坂道を登ってご来場いただいた皆様に、心より感謝申し上げます。

函館文化会「卓話」
～総会終了後に開催しています～

函館文化会では、毎総会後に「卓話」を開催しております。この「卓話」は、総会に集まって議案の審議を終えそれで解散も如何なものか、この機会を活用して著名な方々の話を聞きながら、より会員の絆を深めようと始められたもので、その「卓話」も今回で15回目を数えました。

今回は、平成29年７月、国の重要無形文化財に指定された「長唄」にあわせて、その「文化財保持者」に認定されました三味線奏者で、杵勝会会員の杵屋勝幸恵氏（函館文化会会員）を迎えて「三味線人生よもやま話」と題してのお話しと、杵勝会の杵屋和雪路（三味線）、杵屋勝雪亜（三味線）、杵屋勝幸乃（三味線）、樫田新十郎（鳴物）、杵屋勝幸夫（唄）の皆さんにご協力をいただきお祝いの席で演奏される長唄「島の千歳」などを聞かせていただきました。なかなか耳にする機会が少ない三味線と小鼓の音色に、出席者から大きな拍手が送られておりました。

なお、今回の「卓話」は対談方式（聞き手は、函館文化会副会長　平原康宏氏）で行われましたが、その概要をご紹介します。

第15回卓話（平成30年５月24日）

三味線人生よもやま話

三味線演奏者　**杵　屋　勝幸恵**

……開会冒頭、長唄「島の千歳」を演奏……

ただいま長唄「島の千歳」を演奏いただきありがとうございました。早速ですが、杵屋先生の三味線を始められた動機について、お聞かせください

昔はお稽古事というのは皆さんなさっていたんですね。私は戦争が終わってからなんですが、以前から近くのお師匠さんから踊りやお琴、長唄などそういうものにお稽古に通って、マナーというんですかお辞儀とかお作法とかを教えていただいていたんです。私は両親だということをきかないから、先生の所とかお師匠さんの所にお願いしましょうということでお稽古事をさせていただいたので、別に三味線が大好きというわけでは無かったんです。最初は近くに住んでいた勝之師匠さんという男の先生に習いました。また、家がとっても忙しかったものですからお師匠さんの所に３時間ほど預けられたということもありました。

三味線を始められたことや続けられたことはご実家が巴座だったこととかも影響したのでしょうか。

私もああいう所（実家、巴座）で育ちましたから、歌舞伎とかバレエとか今なら市民会館でやるような興業が私の家で、しかも無料で見られたことはラッキーでした。でも、それはそれだけのことです。三味線は練習すると皆さんが「上手だね」と褒めてくれるのが嬉しかったものです。練習していわれたことができるようになれば、それが励みになるというようなことで続けられたのだと思います。そんなことで学校を卒業しました。みんなが東京の先生の所へ行ったらと薦めてくれたものですから東京へ行きましたが、私がここまで三味線を続けてこられたのはやっぱり指導者がよかったと思っております。それに東京へ行きましても、

はどちらかというと歴史物が多いですから、馴染みのあるものがあると思うので、例えば「初春巴港賑」の勧進帳なんかを見てあれは古くさいものなどといわず、ちょっと挑戦させてお孫さんなんかにも出ていただいたら良いと思うんですよ。私たちもそういう意味で、バックミュージックの方を担当させていただき、これからお話しして下さる堅田新十郎先生にも東京から来ていただいて鳴り物の方をお手伝いしていただいております。

踊りの方では函館邦楽舞踊協会というのがありまして私も入っておりましたんですけど、東京の方の用事が忙しくなりましてちょっと遠のいてしまいましたが、こんどまた函館で演奏会をやってあまり敷居が高くなく、膝つき合わせて聞いていただけるようなものをどんどんやって「あーいいなぁー」「ちょっとだけでもやってみようかなぁー」と思って下さればと思っております。今日も三味線にも触ってみたいなーと思う方はどうぞ勇気を出して触ってみて下さい。小学校の公開授業に行きますと必ずそういう時間をもちます。撥を持って膝に上げてジャラ〜〜ンと鳴らすと簡単に音が出ますから。そのようなことも是非やっていきたいと思っていおります。

それこそ行儀、作法のことからお稽古の曲のことまで周りは立派な先生ばかりで、そこに内弟子というのをさせていただいて朝起きてから夜寝るまでを眺めていましたので、なんとか続けられてきました。函館に戻ってきて、函館もああいう状態になれば良いなぁと続けてきました。

指導にもお力を注いでおりますが、後継者はどうなんでしょうか。

若い方は体力もありますし、是非やっていただきたいと思っております。でも子育てが終わってからやってもまだ間に合いますし、その方の努力次第です。昨日もお稽古に来て下さった90歳のおばさん（おばあちゃんとはあえて言いません）にやっていただいたんですけれど、ちゃんとお上手になるんですね。やはり覚えなきゃだめなんだと思えば他のことは忘れても、いわれたことはキチンとお出来になる。すごいなぁーと思います。ですから若い人の後継者は勿論必要ですが、それを繋いでくださる方がいないと函館もだめになると思うんですよ。昔は湯ノ川温泉近くで鳴り物もさかんでした。本当に函館はすごかったんですよ。清元、常磐津、長唄、俗曲のようなものから小唄、端唄、民謡でもいろいろとやる方がたくさんいらしたんですよ。それがなぜか、今のはやり歌がよくて若い方がやって下さらないんです…。

長唄は突き詰めてやり出すと難しいかも知りませんが、あまり考えずにひょいと始めれば良いと思いますよ。長唄

大衆芸能として津軽三味線がありますが、違いはあるのですか？

津軽三味線とは楽器自体が全然違います。長さとかは同じですが、津軽三味線は棹の部分が太いです。また、糸の太さも違いますし、駒の高さも違います。糸のかけ方も違うはずです。また長唄というのはその状況を表現しようと努力しなければならないんです。例えば、大森浜から湯川の方へ続く海岸に押し寄せる波の様子と、立待岬の岩場に砕ける波の様子を一つの三味線で弾き分けることが要求されます。しかし、それがとっても楽しいんです。お花見でお弁当を持って五稜郭公園で宴会をしようとすると、そういうような演奏を求められます。日本語はとっても良いのは言葉ですね。雨にしても風速何十メートルの横殴りの雨

も、しとしと降る雨も、降っているのか降っていない霧のような雨が道を濡らしているというような時もあります。歌詞によって表現を変化させることを要求されます。津軽三味線の方は、私たちの言葉で手が回ると言いますがテクニックでダッダッダッダ〜っとやれるということで、若い人に人気があるんじゃないかと思うんですね。私たちの方は情緒的なもの、例えば大沼での舟遊びにきて屋形船に乗ってそこでお弁当を食べようとかそういう表現の仕方なんですね。江戸の方では隅田川の情景を表現するというようなことが多くありますね。でも面白いと思うんですよ。音の大きさ、強さ、それだけで色んな表現できるですから。ちょっと波打ち際のお三味線を弾いてみます。湯の浜ホテルの辺りの波も静かなときもあれば、嵐のようなときもあります。

……演奏……

三味線って音符はあるんですか？

音符ですか。はい、音階でド・レ・ミ・ファはあります。それをイ・ロ・ハでつくったものもありますし、また１・２・３・４と言うように番号のものもあります。初心者の方は、三味線の棹にカンニングペーパーみたいに１・２・３・４を貼りそれを見ながらやります。これが一番やさしいですね。

三味線の演奏には指揮者がいないですよね。演奏者はどうやってタイミングを合わせているんですか？

私、最初の「島の千歳」の演奏で藤井さん（唄い手）の隣に座りました。あの場所が一応「たて」というか 、リードというか指揮者の役割をするところなんです。演奏しながら「イョーッ！ハッ」とか「イッ！」とか 「ハッ！」とか小さな声で発しているんです。それはみんなで練習しているので、演奏する人たちもそういうことを全部覚えます。オーケストラの人たちだって、決して今日楽譜を貰ってすぐ演奏している訳じゃなくて、メンバー皆さんで練習に練習を重ねてやっていると思うんです。三味線も同じです。ですから指揮者がいなくても、指揮者の気持ちがわかって演奏しているはずです。

楽しい話をありがとうございました。杵屋勝幸恵先生のますますのご活躍を祈念申し上げ、本日の「卓話」を終わります。また、演奏いただきました杵勝会の皆さんには、お忙しい中ありがとうございました。

こちらこそ、ありがとうございました。それでは、最後に三味線の迫力を楽しんでいただける勧進帳の「滝流し」を演奏して、終わりにしたいと思います。

……演奏……

● 会員を募集しております ●

函館文化会では「郷土の文化を顕揚し、その振興発展を図ることを目的」に活動を続けておりますが、この趣旨に賛同いただける方を募集しております。

皆さんの近くに入会いただける方がおられましたら電話、ＦＡＸ、メールなどで文化会事務局にお知らせいただけませんでしょうか。「入会申込書」をお届けいたします。

● 函館文化会の助成制度について ●

函館文化会では、郷土文化振興事業の一環として郷土文化団体が函館市内において開催する講演会、展示会及び芸能発表会などに対し予算の範囲内で助成を行っております。

事業の実施前に申請を受け、審査の上助成の可否決定いたします。詳しくは、文化会事務局にお問い合わせください。

特集　函館の歴史と文化を語り継ぐ ③

～ テーマ「大門・松風町」～

函館文化会が取り組む「郷土の文化」の伝承に因み、毎年発行する会報に函館の歴史・文化のテーマを取りあげ、会員の皆さんにそのテーマに沿った思いやエピソードなどを綴っていただき後世に残していきたいと、特集「函館の歴史・文化を語り継ぐ」を継続して取り組んでまいります。

第３回目は「大門・松風町」をテーマに取りあげました。函館繁華街としての賑わいを見せてきた街も、今はその面影を探すにも苦労しますが、そんな「大門・松風町」にまつわる思い出を７人の会員から投稿いただきましたので、ご紹介いたします。

なお、次号（第81号）第４回のテーマは「本町・五稜郭界隈」としました。住宅街がいつの間にか飲食店が建ち並ぶ繁華街に変貌した町「本町・五稜郭」、千代台町から五稜郭公園、亀田川周辺まで含めた界隈にまつわる皆さんの想い出・エピソードをお寄せください。応募の要領等は、改めてお知らせいたします。

菊水小路

「大門・松風町」まちの移り変わり

辻　　喜久子

函館市民に「棒二さん」と親しまれた棒二森屋デパートが来年１月で閉店することになりました。今回のテーマ「松風町・大門」地域の中核をなすデパートの閉店です。時代の流れなのですね。昭和９年の大火後、函館駅前地域の商業の中心地としての発展を見込み、西部地区の老舗「金森森屋百貨店」（創業者渡辺熊四郎）と「棒二荻野呉服店」（創業者荻野儀平）が合併して昭和11年に株式会社棒二森屋を設立、翌12年現在地に５階建ての新店舗を完成、開業しました。「棒二さん」の誕生です。西部地区の老舗２店は駅前地域への進出を果たし、戦後の混乱期を経て、高度経済成長期を迎えるなかで、この地域の中核店として、駅前地域の発展を確たるものにしていったのです。

私の若かりし頃？昭和40年代頃のこの地域は、函館駅前から松風町までの電車通りの両側には百貨店の棒二森屋デパートをはじめ、寄合百貨店の彩華デパート（昭和34年開業）や和光デパート（昭和43年開業）が建ち並び、その隙間を埋めるように多種多様な商店や飲食店、娯楽施設等が雑居し、函館一の繁華街を形成していました。そして私達はこの地域の若松町側を「駅前商店街」、松風町側を「大門」（だいもん）、或いは全体を通して「大門」（だいもん）と呼んで買い物や飲食、ウィンドウショッピングなどを楽しんだものです。

函館駅から突き当りの大森稲荷までの約１キロ、両側の海に並行して走る国道５号線と国道278号線に挟まれたこの地域には、函館駅側から「若松町」「松風町」「大森町」の３つの町域が並んでいます。ここで、テーマの「松風町・大門」地域を知るために、３つの「町」について各々の町の歴史を簡単に追ってみることにします。参考にしたのは『北海道地名大辞典』（角川書店）です。編さんに少々かかわったこともあり、この地名大辞典を参考にしました。

《若松町》　明治６年から現在に続く町名。一本木町が改称して成立した町名と言われる。はじめ南北に細長く伸びた町で、１～７丁目に区画されていたが、明治14年の区画整理の際に丁目は消滅した。明治13年に海岸地先が埋め立てられ、さらに同30年には函館区の事業として27,000余坪の埋立工事がおこなわれて同33年に竣工、同37年には函館駅が海岸町からこの埋立地に移転し、新しい駅舎が完成した。また青函連絡船航路の開設に伴い、同43年には隣接して青函連絡船が接岸できる桟橋も完成し、沖合に停泊の連絡船から蒸気船や艀で運ばれていた乗船客は、直接陸に上がることができるようになった。こうして若松町は、鉄道と連絡船の乗降口を控えた函館の玄関口として発展した。昭和９年の大火後には棒二森屋デパートが新築オープンし、当町は駅前商業地域の中核をなす町となった。昭和20年７月の空襲では被災地域となり、青函連絡船や桟橋が被害を受けた。昭和32年、駅の南西側に魚介類、野菜、衣料品、雑貨などを扱う朝市がたち、同40年代には駅前商業地域のビル化が進んだ。

《松風町》　明治38年から現在に続く町名。成立当時、新川町との境付近に小さな松林があったことからついた町名と言われる。明治40年の大火後、西部地区にあった蓬莱町と台町の二つの遊郭が隣接の大森町へ移転、「函館遊郭」（町名から「大森遊郭」とも呼ばれる。）が誕生した。遊郭の入り口に建つ大門前に位置している当町は、地の利を生かし商店や飲食店が雑居する繁華街となった。さらに同43年の青函連絡船桟橋の完成や大正2年の馬車鉄道から電車への切り替えは、当町の発展を一層助長し、設立当時385戸1,530人だった町内の戸口は、大正9年には1,355戸6,112人に増加、遊郭の大門の前に位置する繁華街として「大門」（だいもん）と呼ばれるようになった。昭和9年の大火に被災、地代の暴騰により復興は遅れたが、大火後の西部地区老舗の進出や大門前と駅前を結ぶ電車通りに面する若松・音羽・高砂・松風町の４町の商店主による「大門通り復興睦会」の結成などにより、隣接の若松町と共に市内一の繁華街の中心をなす町となった。

《大森町》　明治５年から現在に続く町名。津軽海峡の沿岸に位置し、町名の大森町は、海岸線沿いに砂山が続き、古くから大盛、高尾森、大高森などと呼ばれていたことによると言われる。明治40年の大火を契機に、西部地区にあった蓬莱町と台町の二つの遊郭を当町に移し、大森稲荷神社から松風町へ向かう大通りを中心に23,000坪の一大遊里「函館遊郭」（町名から「大森遊郭」とも呼ばれる。）が造成された。この遊郭は、昭和31年公布、同33年完全施行の「売春防止法」により廃止となったが、その間約半世紀にわたり函館を代表する歓楽街としてその殷賑を極めた。松風町側の遊郭への入り口（元の大森町巡査派出所横）に建てられた大門に因み、この付近一帯の繁華街は「大門」（だいもん）と呼ばれ、同時に函館一の繁華街の通称名ともなった。遊郭の全盛期だった大正期、遊郭内の貸座敷は80余軒、その他郭内には料理店、飲食店、雑貨店、湯屋、理髪店など数十軒の関係業種が店を構えていたという。しかし昭和期に入り、カフェー全盛期を迎え、さらに昭和９年の大火に被災し、復興できたのは30軒程度という状況で、そこには大火前の賑やかさはなかった。その後敗戦、進駐軍の上陸、公娼制度の廃止、赤線地帯の設置、そして「売春防止法」の施行を経て、函館遊郭は終焉を迎えた。

昭和48年　松風町電停上空から函館駅方向を見る
（松風町史より）

函館一の商業地域を誇示していた駅前・大門地域でしたが、バブル経済の破綻、長引く経済不況の中での函館市の人口減少と亀田市との合併による北東部への人口移動、それに伴う五稜郭・本町方面や美原町方面への商店、飲食店の移転、さらには平成元年の出漁を最後に北洋漁業の基地としての函館の役割の終焉。これらと並行して函館駅前・大門地区の商店街は次第に衰退を始めたのです。（「函館市史」通説編４）

しかし、昭和63年の青函トンネルの開通をはじめ、平成28年の北海道新幹線の新函館北斗駅へ乗り入れや新しいラウンドマークタワー「キラリス函館」のオープン、函館港若松地区のクルーズ船専用埠頭岸壁建設工事の着工、駅前

地区のホテル建設ラッシュ等々、観光行政に力を入れる函館市の中核地域・中心商店街として、函館駅前・大門地域が少しずつ動き始めています。テーマの「松風町・大門」地域の町の変遷を見てきましたが、函館っ子の一人として、駅前・大門地域が再び函館の中心地域として脚光を浴びる日が来ることを期待しております。

◆

つじ　きくこ　昭和26年函館市生まれ。昭和49年函館市に勤務、市史編さん室主査、職員厚生課長、健康づくり推進室長、保健所参事などを歴任し、平成24年退職。現在、函館市医師会健診検査センター参事

懐かしき「大門」への思い

菅　野　剛　造

改まって「大門」と聞くと、どうしても港まつりが頭に浮かぶ。今年も港まつりは盛況裡に終わったが、昔は、まつりが近づくと、函館市内の至る所に舞台が設置され、まつりの期間中、その舞台では浴衣姿の付近の住民たちが歌と太鼓に合わせて踊ったものだ。時代の流れか、最近は、そうした舞台も殆んど無くなって、何とも寂しい。

どうして、「大門」と「港まつり」が関連するのか。それは、私が子供の頃だから、もう60年以上も前になるが、港まつりになると、街中に必ず流れる曲の歌詞に「大門」があり、その響きが今も忘れられないからである。昭和25年に高橋菊太郎が作曲、瀬川　伸（瀬川瑛子の父）が唄った「青い海、函館の」で始まる「函館ステップ」がその曲で、「大門」はその２番の歌詞にあった。

夢の街　函館の
　　街は楽しや　柳はなびく
行こか大門　戻ろか銀座
　　招くネオンの　赤と青

当時、函館の繁華街と言えば、十字街近くの銀座通り地区とここ大門地区だったが、私としては、子供の頃、よく父に連れられて出掛けた大門が忘れられない。初めて寿司を食べたのも、初めてソフトクリームを舐めたのも大門だった。今のマルハン横のグリーンプラザ入口の前に、白いアーチ状の大きな門があり、上に「大門広小路」と記された看板が掲げられていたように記憶する。子供心に、「だから『大門』なんだ」と思い込んでいた。

「大門」は、文字通り「大きな門」だが、それは、昭和９年まで、今の「しまむら大森町店」前と駅前道路を挟んだ向かい側の角に立てられていた一辺１ｍ、高さ10ｍもある四角い石造りの大きな２本の柱が由来である。だが、それを知ったのは、ずーっと後であった。そこから大森神社に至る地域が黒塀で囲まれた「大森遊郭」であり、その２本の柱が遊郭の門柱だったのだ。だが、昭和９年の函館大火で、その門柱は崩れ、その後、再建されなかった。昭和33年、売春防止法に基づき、大森遊郭は廃止されたが、その後も「大門」の名は残り、何時しか、函館を代表する大繁華街の呼称となった。

さて、本題の大門に関するエピソード。私は、父親譲りの「呑兵衛」で、学業を終えて函館に戻った昭和40年代以来、職場が付近に所在したことを奇貨として、安月給から何とか酒代を工面し、毎晩のように大門繁華街に繰り出していた。今も、柳小路、音羽通り、仲通り、京極通り、祇園通りなど、名を残す「小路」がたくさんあるが、かつては、どの小路にもバーがあり、いつも満員、特に北洋漁業が盛んな頃は常連さえ入店出来ないほどの賑わいだったのを思い出す。

今も残る「ぎおん小路」の看板

ただし、私が出向くのは、何れも市電通りを挟んだ五稜郭側の小路で、向かい側の「祇園通り」には殆んど足を運ばなかった。当時の祇園通りは、接待に利用される高級バーやクラブがひしめく大門屈指の高級飲み屋街だったが、ある事情で足が遠のいたのである。恥ずかしながら、そのエピソードだ。

今、思えば笑い話だが、その頃、東京から遊びに来た3人の学生時代の友人にイイ顔をしようと思い立ち、父親が時々利用していた祇園通りの高級クラブに出向き、父親の名を借りて、ツケで呑んだのだった。ところが、その月の月給袋を開けて驚いた。何と月給数万円の中から、飲み代として相当金額が天引きされていたのである。泣きそうになったが、父親からの「身のほど、わきまえろ」の教訓と受け止め、それ以来、祇園通りから足が遠のいたのであった。

そんな時代から50年が過ぎた。それでも、大門で呑み続ける習慣が続いている。ただし、歳を重ねるに従い、出入りする店も限られるようになったのは事実。若い時は、どの店にもブラッと立ち寄ったものだが、面倒くさくなったのかも知れない。そして、何時しか、足しげく通う店の主役は小料理屋になった。それは、バーやスナックの開店時間が大体20時だったことも背景である。仕事が終わった後、時間つぶしを小料理屋さんのカウンターの前ですることになったのだ。しかし、馴染みになると、常連客とも顔見知りとなり、結局、長時間、居座ることになる。そうした行きつけの粋な小料理屋さんが2～3軒あった。残念なことに、それが、最近、相次いで閉店してしまった。正に心にポカッと穴が開いたような気持ちが毎日続いている。

そんな思いを抱きながら、改めて「大門」の現状を振り返ってみたのだが、今、祇園通りを除けば、どの小路にもバーやスナックは殆んど無い。あっても1軒か2軒、いや、祇園通りだって寂しい。高砂通り周辺を主体に、ケバケバシイ看板の居酒屋はあるが、私が求めるような粋な小料理屋さんは殆ど見られない。往時の殷賑を知る者にとって隔世の感と言うしかない。

それでも、大門好きの私の足は止まらないだろう。ただし、「徘徊するジジぃ」と思われないように注意することだけは忘れないと心に決めている。

◆

すがの　ごうぞう　昭和19年函館市生まれ。昭和43年4月学業を終えて東京から函館に戻り、㈱日刊政経情報社に入社。同50年9月同社社長に就任、現在に至る。

永遠の大門派

小　林　裕　幸

自分と函館との関わりを振り返ると、まず脳裏に浮かぶのが青函連絡船で初めて青森に向かった時のことである。乗船客用の高所に設えられたタラップから見下した冬の夜の「黒い海」と、船体に打ちつけ砕ける波であった。昭和18年1月中旬、3歳3か月の小生が、関西旅行に向かう両親や祖母に伴われて函館を初めて訪れた時のことであった。

その日の昼下がり、人波が切れない函館駅前通りでも、向かってくる大人に注意して歩かねばならず、怖さを感じていた。当時の函館は北海道・東北随一の都市で、駅前から大森浜までの賑いは、子供の目にも凄まじく写った。当市への第一印象は、初体験する船旅への怖さもあって、「恐怖」であった。

その後は、湯川での入浴やおいしい魚介類を食べて、次第に楽しい印象へと変わってきたと感じていた。それが、劇的に変化を遂げたのが、学生時代を経て、放送に携わる社会人になってからである。子供の頃の「怖いまち」から、興味ある研究対象の街に変わったのだ。そのきっかけは、学生時代に東京への往復時に乗った青函連絡船内や上野・青森間の列車で出会った「函館を愛する人達」に聴かされた、当地の歴史に絡むストーリーであった。老若男女を問わず、その方々が語った話は、自分が初めて聴くものばかりだった。「歴史には裏表があるのだなぁ～」と気付かされ、大人の世界に一歩足を踏み入れたと感じた時でもあった。

さあ、ここからは、「大門」と小生の関わった懐かしいお店を中心に取り上げる。初めて「大門」と聴いた時、小生は樋口一葉の珠玉の短編「たけくらべ」を思い浮かべた。東京・吉原の美しくも哀しい遊里の女性を描いた作品である。その冒頭を、原文のままご紹介する。

「廻れば大門の見返り柳いと長けれど、お歯ぐろ溝に燈火うつる三階の騒ぎも手に取る如く、明けくれなしの車の行來にはかり知られぬ全盛をうらなひて〜」。

吉原の「大門」は「おおもん」と読む。その謂れは、徳川家の菩提寺、芝・増上寺の旧総門が「だいもん」と呼ばれ親しまれていたため、遊里の吉原が同じでは〜ということで「おおもん」としたとされる。当函館の大門は、明治40年の大火後、蓬莱町や台町にあった遊郭を大森町に移設し、この地への出入り口に「大門」を建てたので名付けられた。当初は「おおもん」と言っていたが、何時からともなく「だいもん」が通り名になった。函館駅の完成が明治37年。駅と大門との間にあった土地に松の木と墓が多いので、町名を「松風町」と決めたと「松風町町会創設50年史」は記している。その後、同町内には商店が立ち並び、賑わいが始まった。

その松風町界隈だけでなく駅前地区からを「大門」と捉え、現在は他地区に移転したお店や、既にその姿が歴史に埋もれたお店も含めて振り返る。

かつて「20世紀〜」の小路にあった「本間理容院」をご記憶の方は多いと思う。今は「ミューレンス・レオン」と名は変え、富岡２丁目にある。初代の本間慶治氏（97歳）は、90歳で現役を退かれたがご健在で、２代目慶彦、３代目の靖大両氏を見守る毎日である。お店には昔からのファンが多い。小生も函館赴任以来25年、散髪をお願いし、本稿の資料として50年史も拝借した。

さて、時代は北洋漁業全盛の昭和40年代前半に遡る。当時、「太洋ホエールズ・現横浜ベイスターズ」が、千代ヶ岱球場（現函館オーシャン球場）で、セリーグ定期戦「太洋・中日２連戦」を開催していた。その試合を中継する先輩のお供で函館通いが始まった。

前夜から宿に陣取った小生たちは、「スタンバイ・準備」が済むと、酒を余り嗜まない先輩の許しを得て、北洋帰りの人達でごった返す「大門」へと繰り出した。小生たちが向かうのは、まず定番の「寿司屋」。散々食べた上での支払いの安さに驚き、はしたなくも店の戸口を出ると一目散に駈け出したことを記憶している。「お店が、きっと勘定を間違えたに違いない」と〜。

その我々におおらかに付き合ってくれたのが北洋帰りの人達である。若い我々には及びもつかない数のお札を懐に、大門の初夏を謳歌していた。彼らは、「お兄ちゃん、一緒に楽しくやろうぜ」と誘い、全てを支払うのだ。これには、「聊か参った」ことをご報告する。

雑踏を避けて入った書店「森文化堂」で、その後の我が人生を強力に函館に結び付ける一文との出会いがあった。栗本鋤雲の「箱館叢記」である。出張旅費を叩いて買い求め、箱館時代への記述に目を見張り、遅くまで読み耽った。惜しくも今はない森文化堂に感謝を捧げる次第である。

この一文との出会いから、小生の「函館」への傾斜が増し、番組でも「大門」との付き合いが広がり、深化した。それは、当時担当していた「ＳＴＶデイリーステーション」というラジオの生活情報ワイド番組を、毎年一週間、函館から生放送する機会を得たのだ。スタジオは、棒二森屋のショーウインドウ。この時ゲストで出演頂いたのが、いずれも故人となられた五島軒先代の若山徳次郎氏、カール・レイモン氏、太田比古象氏など函館をこよなく愛する方々だった。特に、凧の太田比古象氏には、良き時代の函館を語っていただいた。この今は亡きお三方には、「君は将来必ず函館に住み、歴史を研究するように」と念を押された。

字数も残り少なくなった。単身赴任した平成６年から付き合った名店に触れたい。懐かしい「人とお店」ばかりである。大森交番隣の「澤寿司」。変わり者で有名な黒澤夫妻は、時代を先取りし、店内では喫煙を止めるよう客に求めていた。握る寿司は最高、そして「狂」の字が付く巨人ファンだった。祇園通りの「若松」。番台スタイルで座る「母さん」が客を手際よく捌き、熱燗と「おでん」が良くマッチする名店、「魚一心」は、「お父さん」の包丁捌きで刺身を食し、イカ耳の美味さを教わった。現在も大門横丁傍の「津軽屋食堂」は、ビールとカツカレーの相性の良さを想い出すと足が向く。焼き塩サバの味も抜群だ。そして、多くの函館っ子を呼び寄せた、大門広路の懐かしい「フタバヤ」。現在はご子息達が美原などで、昔ながらの味を提供している。毎夏１度は、まず「ソフトクリーム」を食べ、

昭和52年　駅前通りアーケード・カラー舗装完成
（松風町史より）

ビールで乾杯し、独特なソースのハンバーグを食べて盛り上がった。小生は甘辛両党遣いだが、後にも先にも同時進行は初めてで忘れられない。こうして大門の名店は挙げると際限ない。ご異論ある方にはご寛容をお願いし、駄文へのお付き合いに、心から感謝申し上げる。

◆

こばやし　ひろゆき　昭和14年札幌市生まれ。昭和38年札幌テレビ放送にアナウンサーとして入社。平成６年から函館放送局長として勤務、平成11年退社の後、函館大学教授

時のうつろい

今　井　由　治

私が小学生の頃、デパートの丸井は十字街の一角にあった。当時私は元町に住んでいたので、学校帰りや日曜日に時々一人で“遊び”に行ったものだった。しばらくすると丸井は五稜郭へ移転となった。十字街を中心とした西部方面がひと昔前に輝かしい繁栄を築いた最後の名残りとも言うべき丸井の十字街撤退は、栄枯盛衰を物語る象徴的な出来事だったと言ってもいいのかもしれない。丸井の移転を待つまでもなく、すでにいちばんの繁華街は駅前から松風町にかけて、いわゆる大門地区一帯にあった。それは子供の目にも明らかだった。私にも幼き日の思い出がある。年にほんの数回ほどだったと思うが、母親が連れて行ってくれた棒二森屋の食堂で食べたアイスクリームの味は今でも忘れられない。

大門と言えばやはり夜。アフターファイブだ。宵の訪れとともに魅力的なネオンの灯が界隈を彩る。子供の頃には知る由もなかった“夜の大門”であるが、後に社会人となった私は、私たちの一つ上の世代が身に染みて味わったであろう毎晩がお祭りのようだった全盛期から比べるといささか低調気味になったとは言え、まだまだ勢いのあった大門の一端を如実に実感することになるのである。

私は1978年に地元青年会議所（ＪＣ）に入会した。中学卒業後の10年ちょっと地元を離れていた私には180名ほどの会員は知らない人ばかり。函館の街も中学生までの行動範囲でしか知識も体験もなかったのである。まるで浦島太郎状態の私を、先輩たちは温かく迎え入れてくれた。会議が終わるとお決まりの“大門”である。徐々に友達も増え、若さも手伝って多い時には週に２回くらい出かけていたように思う。恥ずかしながら、私は大門に行きたいがために真面目にＪＣ活動に参加したという側面を否定できない。

ＪＣの先輩の中には豪傑が何人もいた。高級クラブをひと晩に何軒もハシゴをしたり、大門中のクラブやバーに何十本ものボトルを置いている先輩もいた。もちろん私にはそんなマネはできなかったが、それでも同期入会の仲間と食事したり、そのあと一杯やりに行ったりと、まだ華やかし頃の大門を多少は知っているつもりである。こんなこともあった。ＪＣの会合のあと、先輩に連れられて大門に行った時のことだ。新装開店の店が目にとまり、そこで飲むことになった。２時間ほど楽しく過ごしたあと、先輩が私に勘定を頼むと言ってきた。運悪く私も持ち合わせがなく「どうします？」と聞くと先輩は「トイレから逃げるか」と冗談を言いながらも笑いながら、さっと名刺を出し「ママ、これで頼む」と何事もなかったかのようにその店を後にした。カードなどあまり普及していない時代のことである。名刺を受け取った店のママもにこやかに応対してくれた。当時の大門は、なんとも懐の深い寛容で親しみのある町だった。

そんな大門もやがて時代の波に呑まれてしまう。高齢化や

平成17年松風町につくられた屋台村「大門横丁」

造船不況など、様々な社会情勢の変遷とともに、絢爛たる賑やかな時代は長続きしなかった。バブル崩壊を機に私たちの世代はその隆盛を誇った大門の凋落をも目にすることになる。馴染みの店が少しずつ本町・五稜郭へと移転していく。廃業してしまう店もあれば、どこか人知れず消えていった経営者も…。年々本町方面への移転流出はどんどん加速度を増していった。

時のうつろいとともに、もはや私たちの知る大門はそこになかった。さらに時はめぐり、ついには往時“街いちばんのデパート”と市民に愛された棒二森屋が、私の少年時代の思い出も道連れに姿を消してしまうらしい。それは街の中心がすでにそこにはない、時代は変わったのだという天からの宣告なのか、それとも、再生・復活の好機と捉えよ、とするご神託なのか？その答えを出すのは私の次の世代におまかせしようと思う。

数日前、一状の封書が会社に届いた。30年以上も前によく利用した店のホステスさんからだった。周りがみんな本町へ移るなか、ずっと動かず大門で自分の店を持ち、なんとか切り盛りしていたが数年前に店をたたみ、その後やはり大門の友人の店を手伝っていたとのことが綴ってある。そしてその友人が閉店するにあたり、店を譲り受けて自分が続けていくという内容の案内状だった。彼女ももう還暦を過ぎているはず。やはり古き良き時代の大門を忘れられないのだろう。そういう私も、いつしか昔を懐かしむ“年頃”になったのか。応援してやりたいと思う気持ちも胸をよぎる。30年振りに大門で飲んでみようか。

◆

いまい　ゆうじ　昭和27年神奈川県鎌倉市生まれ。大学卒業後、昭和52年家業の今井給食部に入社。父の死後、平成６年㈱今井メディカル給食を設立、代表取締役に就任し現在に至る。

朝市界隈に暮らして

山　田　涼　子

私が東川町から若松町の朝市に移り住んだのは、小学校４年生位の時だったと思う。私の家は、食料品や衣料品を扱う小さな商店で暮らしを立てていた。多分、両親は行末を考えて、大門、松風町方面に新天地を求めたのであろう。後で母に聞いた話では、新川市場に近い商店街と朝市の２個所が候補地であったとか…。

静かでのどかだった東川町から商店ひしめく人の出入りの多い賑やかな朝市へと私の環境は大きく変わった。とにかく見るもの聞くもの皆珍しく新鮮であった。

当時の朝市（昭和30年代）は、屋根も無いだだっ広い青空市場であった。その広場に面して小さな店舗兼住宅が立ち並ぶ一角に、わが家は店を構えた。衣料品や自転車、時計などを扱い、「買入」という看板を掲げていたが、質屋のようなものだったのか定かではない。朝早くからわが家の横通りには、品評会のごとく馬の顔がズラリと並んだ。ドッキリである。近郊の農家が馬車で農作物を運んできて商っていた。何しろ狭い通路だったのでこの馬に噛まれた人もいたと聞いている。今も目に焼付いていて忘れがたい私の朝市の風物詩である。

程なくして、ホテルニューオーテの向かい側に、店舗と住宅を兼ねた棟続きの建物が新築され、その角店に移ることになった。通路をはさんで隣には渡島蔬菜農業協同組合の事務所があった。高校１年の夏に父が病死し、母が１人で店を守っていたが、私が昭和42年に市役所に就職したのを機に廃業し、店舗の部分は海産物等を商う近郊の人に貸すことになった。ふり返ってみれば、私は昭和30年代から昭和50年代に結婚するまで、朝市というとても恵まれた環境に身を置いていたのだと思う。

松風町電停から東雲町に走る市電（山田民夫氏提供）

大門、松風地区は、朝市での生活の延長線上にあった。遊びに行く時はもちろん松風町、和光デパートの向かい側にあった「キングベーク」の前あたりで友人と待合わせて、夕食は大門広小路にあった「フタバヤ」で、定番のハンバーグとエビライスをペロリと食べてから踊りに行くのである。当時流行っていたゴーゴーにはまっていた。今では赤面ものだが、太い足にミニスカートをはいて、生バンドやジュークボックスの音楽に合わせて踊っていた。大門広小路近くにあった「ブルースポット」は、よく通った踊りの場である。最後の〆は、柳小路にあったおでんの屋台でみそおでんをほおばって小腹を満たした。谷地頭方面に向う最終電車（当時は12時頃まで走っていた）に乗る友人を見送ってから家路についた。

ショッピング、特に洋服類は、大門広小路沿いの「ニューイトヘイ」と並ぶ「むらかみアン」と「むらかみジュネ」、流行りの若者向けの洋服が多く値段も手頃であった。しかし、何といっても憧れは、「ニュールック」であった。階を上る程に高級になっていって、とても私の給料では手が届かなかったが、その品質、デザインは素晴らしかった。買うことは出来なくても大いに刺激を受けたものである。角地でシンボル的な建物だった「ニュールック」の灯が消えたことはとても残念である。

母との思い出はお寿司。母はお寿司が大好物だったので、ボーナスが出るたびに、和光デパートの横通りにあった「三川寿司」へ行った。三川はうなぎの店であったが、店内にこじんまりとしたお寿司のカウンターがあった。シャリは少な目で味も良く、ネタも新鮮で絶品であった。忘れられない味である。

銭湯に通うのも松風町近辺であった。当時の朝市の商店街で内風呂のある家は殆んど無く、皆銭湯へ通った。電車通りにある松坂屋カバン店の露地奥には「松の湯」があり、和光デパートの裏手の方だったと思うが、「白山湯」、そして市役所近くに「がらす湯」があった。どの銭湯に行くにしてもよそいきの街松風町を通らねばならず、普段着の格好でかさばる風呂道具を持って歩くのはいつも気がひけたものである。

昭和という時代を長く生きてきた私にとって、大門、松風町の近くに暮らせたことは、幸運であった。棒二森屋デパートを軸として和光デパート、彩華デパートがあり、それに連なる店もあって、ショッピングには事欠かなかった。お寿司やうなぎ、天ぷら、ラーメンなどこだわりの食事処が充実していて胃袋を満たしてくれた。お茶したいと思えば雰囲気のある喫茶店も数多くあった。枚挙にいとまがないくらい、大門、松風町という街からたくさんの豊かさを享受できたと思っている。

時代の流れなのか、駅前地区の要ともいえる棒二森屋デパートがその役割を終えようとしている。多くの店がその姿を消して、居酒屋と駐車場ばかりが目につく。しかし、一方で函館駅が整備され、和光デパートの跡地に家族づれで楽しめる「キラリス」も建てられた。大門横丁では地元の人や観光客で賑わっている。若者の起業も増えていると聞いている。大門、松風町の灯を消すまいと頑張っている人たちがいる。

大門、松風町が未来に向かってどのように発展していくのか。この街をこよなく愛するファンの１人として見守っていきたいし、応援していきたいと思っている。

◆

やまだ　りょうこ　昭和23年函館市生まれ。昭和42年函館市に勤務し、消費生活係長、働く婦人の家館長、文化財課長、子育て推進課長などを歴任し、平成20年退職。現在、函館煎茶道連盟理事

大門通りの思い出

能登谷　　公

昭和47年、私は大門の老舗の長女との結婚を機にその店の店長として大門で働き出し、大門・松風町は若い頃からよく知っていた街でした。

８月中旬に大門広小路で「大門夜祭」が３日間開催され、金魚すくいや射的ゲームに焼き鳥、たこ焼き、お祭り限りの星龍軒のラーメンなどの屋台が並び、特に大きな櫓が組まれた盆踊り会場は大盛況で、踊りの輪が老若男女で二重三重になるほどでした。盆踊りでは「大門音頭」が流れ、この「大門音頭」を聞きたくて来たという市民が大勢いた

ことに感銘しました。この光景を眺めていると、華やかしき頃の大門が目に浮かびます。

そんな華やかしき駅前・大門通りの昭和30年代後半から50年代に至るまで、印象に残っているお店屋さんや通りのことなど記憶をたどりながら綴ってみました。

駅前通りに並ぶ専門店

函館駅正面には、一時間ごとにオルゴールが刻む大時計があり、この音で「もうこんな時間か」と気付かされたものです。駅の向かい右側には「北斗電気」があり、全国チェーンの量販電気店が函館に進出する前は、この電気店が函館の家電販売の中心だった。また、その頃一世を風靡した「ヴァン・ジャケット」を函館でただ１軒販売していた「ヴァン・ホリタ」があり、函館の若者のファションを引っ張っていた。通りには「カネツ渡辺時計店」や「タキエ洋装店」「トラヤ額縁店」「メガネの宝山堂」などが続くが「宝山堂」は、私が中２の時に始めてメガネを作ったところで、先代店主の馬鹿丁寧なほどの説明に、感心したものだ。他にも「ニュー糸平」「ほていや」「三喜屋」「赤帽子屋」「弁慶力餅」「ニュールック」などが並ぶ…。

特に、楽器・レコード専門店の「大森楽器店」では、店頭で有名歌手がキャンペーン等で歌を披露することがしばしばあった。大森社長は、北海道の業界でも力のあった方で大物歌手でも必ず挨拶にお店を尋ねていた。私を可愛がってくれていた社長はその度「ハムちゃん（私の愛称）、今日は〇〇が来るよ」と教えてくれ、大物歌手と握手をしたり色紙をもらった思い出がある店だ。

また、専門店ではないが棒二森屋の向かいに「国鉄の物資部」があり、まだスーパーやコンビニのない時代で定価の２・３割引きで購入できるため、大変な盛況だったが国鉄職員や家族であるというパスが必要で、私の母などは国鉄の知りあいからパスを借りて、買い物をしていた記憶がある。また、秋には国鉄職員やその家族を対象とした、慰安会と称する歌謡ショーを当時の有名歌手を招いて「巴座」で盛大に行っていた。当時は、函館の人の５人に１人は国鉄関係者と言われるほどで、俗に言う「国鉄城下町」だったのだと思う。

喫茶店全盛期

函館は、安政４年（1857）に箱館奉行が薬用にコーヒーを配った記録が残るなど、国内で最も古くからコーヒーが

平成30年８月「大門夜祭」で行われた盆踊り

普及した土地の一つで「珈琲の薫る街」というイメージを持っていた。北洋漁業最盛期の大門には様々にタイプの喫茶店が建ち並び、その数は50件余りにも及ぶ。純喫茶、ジャズ、名曲、和風、高級、同伴など喫茶店銀座といわれた大門仲通には100人以上も収容出来る大型店も数軒あった。昼間はサラリーマンや近くの商店街の人々が、夕方になると若いカップルの待ち合わせやデートの場所でもあり、クリスマスから正月、北洋漁業の出港時には朝早くから深夜まで、どこの喫茶店も満員御礼の札が下りるほどの賑わいであった。私が足蹴に通った「えんじゅ」に「アカデミー」「モーリ」「モンブラン」「ロイヤル」「茶房上野」「白鳥」「新樹」「美鈴」「ポルタ」「ピクニック」…、まだまだあった。

食の街、大門

函館を訪ねてくれる友人は「大門は食べものに困らない」とよくいったものだ。ラーメン屋、そば屋、すし屋に焼鳥屋などが軒を並べるように立ち並び、それぞれ特色があった店も多い。

焼きそばが有名だった「丸王王さん」、おばちゃんの甲高い声が有名であった「汪さん」、ここの広東麺と掛け炒飯は有名で、暑い夏に熱々の広東麺を汗をダラダラ流しながら食べるのが、通と言われていた。「ビル食」はそば屋なのだが寿司部もあり、またここのラーメンが私は大好きだった。「兼丸一巴屋」のそば屋、日中はもとより夜は酔客で遅くなるまで賑わっていたものだ。その他にも、甘味処「桝金」「焼き鳥太郎」、「鳥辰」、「ラーメンの林さん」などが記憶から呼び戻すことが出来るが、何と言ってもお世話になったのは、夜遅く柳小路に開店する屋台の「おでん屋」で、あの元気なおばちゃんの顔が今も思い浮かぶ。宴会場の完備した割烹も賑わいを見せていた。祇園通りに

「尾上」、富士銀通りに「入り川」「夢むら」、中華料理「東海飯店」、和光の通りに「はいや」、高砂通りに中華料理の「陶陶亭」などの他、棒二森屋の前の「函織ビル」には、「山立はいや」が経営する「和風レストラン三笠」がオープンし、このようなお店が函館では珍しかった事もあり、連日、時間待ちのお客さんが出るほど大盛況だった。

不夜城と化した大門裏通り

大門で忘れてはならないのが夜の社交場、大門にはバーやクラブ、ダンスホール、キャバレーがひしめきあっていた。ダンスホールでは、「コンセール」「ナンバーワン」「ブルースポット」、祇園通りの奥に「悪魔の城」、富士銀通りの奥には「アシベ」など。大きなキャバレーも柳小路の「ニューフロリダ」、祇園通りに「ハーバーライト」、京極通りに「未完成」と「チャイナタウン」があり、商売柄ホステスさんにお得意さんがおり、「チャイナタウン」に洋服などを届けるときには、その頃珍しかったエスカレーターで導かれるように上がると、大胆にスリットされ体の線がくっきりと映るチャイナ服のホステスさんが出迎えてくれ、謎めいたスリットの奥を想像してゾクゾクしたものだ。

まだまだ印象に残る店、その後に映画館やお風呂屋、デパート、パチンコ店なども綴りたかったのだが「そんなに、紙面がありません」との指摘を受けて、ここまでとなってしまった。書きとどめたものは、何かの機会に函館市民の皆さんにも記憶に残していただけるものとして考えてみたい。

こうして大門通りを思い出すと時の流れがいかに速いものか、つくづく考えさせられる。私は戦後生まれだが、70歳を目の前にして自分を振り返る歳になったのかなと思っているが、これからも大門と共に暮らしていきたい。

◆

のとや　こう　昭和24年函館市生まれ。函館西高校を卒業後東京の大学に進学、その後昭和47年函館に戻りふくすけ屋に入社。平成３年函館市議会議員に当選、平成23年第43代議会議長に就任、現在７期目

「大門・松風町」の想いを短歌に綴る

齊　藤　修　三

６月30日、今朝の新聞に「棒二来年１月で閉店」の活字が躍る。「大門・松風町」の賑わいをつくってきた百貨店・棒二森屋（昭和12年　1937年開業）の閉店は寂しい。往時には彩華、和光デパートもあり、屋上には子供の遊具を備え、電車通りの左右を中心に専門店が軒を並べ、市民はもとより近隣近在からの買い物客で大いに繁盛していた。各通りには、映画館、芝居小屋、喫茶店、パチンコ店、麻雀荘、ボーリング場、飲食店、ダンスホール、キャバレー等の娯楽場や社交場があり、老若男女の憩いの場として高度成長の波にも乗って夜ともなると不夜城と化した。

その後、200カイリの問題、造船不況、国鉄の民営化などが続き、バブルもはじけて経済は低迷の一途を辿り、当時の繁栄の面影は少し残るだけ。

このような状況の中にあって、函館市が平成25年度から取り組んできた「中心市街地活性化基本計画」が３月末で満了。アーケードの撤去や市電「松風町」「函館駅前」両電停の改築、再開発ビル「キラリス函館」の建設補助など。５年間で市が同地区に投じた額は17億円に上る。

今年は北海道新幹線開通から３年、開業効果が一服する中、駅周辺から「大門・松風町」にかけて、ホテルの建設ラッシュが目立ってきた。外国人観光客増に加え、新幹線の札幌延伸も道南観光にプラスに働くとみて、投資熱が冷める様子がみえない。市電沿線は一部で「居酒屋通り」と呼ばれるほど飲食店が急増。大門は観光客が集うまちへと変貌を遂げつつある。今後の「はこだてグリーンプラザ」の整備計画にも注目が集まる。

函館市は、将来を見据えて４月、郊外からの都市部への緩やかな人口移動を促す「立地適正計画」を策定。地元商店街においても集客増を図るため、長い時をかけ「大門祭」など趣向を凝らした各種の催事を行ってきた。今後、棒二森屋跡地再生後の大門に市民の賑わいをどう生みだしていくのか。北の黎明の地を一新するため、官民が連携して知恵を出しあう時期にきているのでは。

ここに、「大門・松風町」に再び栄えあれと願いを込めて、当時の想いの一端を短歌に綴ってみた。

よそ行きの服を着せられ大門に
御昼は棒二さんの食堂に

母に連れられ万歳館通り（グリーンプラザ）商店街の大売り出しへ。衣類の叩き売りが行われ、多くの人でごった返す中を、あちこちの売り場へ。よい子の褒美は棒二さんの食堂へと。

巴座の君島座長に魅せられて
枡席四円九十九銭

当時は税の賦課は５円から。大衆の懐ぐあいを考慮した館の奉仕値。君島が演ずる人情・活劇が受け、満員の観客からヤンヤの喝采を浴びる。

六カ月北洋船団漁師らが
支度百万ネオンの海へ

４月は漁具や食料の調達が始まり、５月には“北洋さん”と見送りの家族や漁業会社の人びとで繁華街は人であふれる。送別の宴は夜遅くまで続き、盛大な出港は北海道の春の風物詩にもなった。

往時には 娯楽の殿堂十二館
封切り満員歓声をあげる

娯楽も少なかった昭和30年代、一般家庭にテレビが普及するまでは、映画の全盛期。封切りは人気の的、心をわしづかみにした。「用心棒」「エデンの東」「太陽がいっぱい」等々。今も鮮明に脳裏に焼きつく。

昭和27年北洋漁業の再開で函館の街はヤン衆で賑わう
（松風町史より）

街の顔集う賑わう情報の
今昔伝える「大門かわら版」

地元有志の一人、水山一嗣氏（ジャズスポットリーフ店主）らが、函館の顔としての「大門・松風町」に誇りを持ち、情報提供紙「大門かわら版」の発行を続け感銘を抱く。

◆

さいとう　しゅうぞう　昭和16年函館市生まれ。昭和36年函館市に勤務し、観光宣伝係長、スポーツ振興課長、保健所管理課長などを歴任し、平成14年退職

函館文化会「ホームページ」、「ブログ」の開設

「函館文化会」では知名度の向上と事業活動の推進のため、函館文化会の歴史や概要、事業の内容及び案内、報告などの情報を、インターネットを通じて会員はもとより全国・世界に発信することを目的に函館文化会「ホームページ」、「ブログ」を開設しております。一度ご覧いただき、ご感想・ご要望など事務局にお寄せください。

アドレスは、次のとおりです。

- ホームページ　http://hakodate-bunkakai.com/
- ブ　ロ　グ　http://blog.livedoor.jp/bunkakai/

特別寄稿

大沼電鉄物語

佐　野　史　人

七飯町民との会合で大沼電鉄に関して、時折話題となることがある。「大沼電鉄って電車なの？」と聞き返されることがあるが、「電鉄というのだから…」と大笑いになるが、大沼に電車が走っていたとなるとビックリというのが本音だ。私も、そのビックリした一人で、大沼に電車が走ることになった時代的な要求は何だったのか、また、何故廃線になったのか疑問をもち調査を始めた。

輸送手段の要望と必要性

当時の鹿部村は漁業と間欠泉で知られる温泉のまちで、鹿部村一帯の村々の輸送手段が海上輸送に頼っており、住民から陸上輸送を望む声を聞き、道路建設に手を挙げた東本願寺門徒によって、明治３年軍川から砂原までの約18㎞の道路整備がなされ「本願寺道路」と呼ばれた。この道路は、現在の軍川からのミルクロードであること、また、この道路工事に携わった東本願寺門徒の作業指示をする僧の姿が描かれた作業風景図が残っており、今回、初めてことを知り感動した。

本願寺道路開墾の図

それまで、荷馬車で通れるように改修されていた「藤山道」とつながり鹿部から函館への物流が大きく改善され、この地区の開発が飛躍的に進んだ。ところが、整備された「本願寺道路」も熊などの出没で極めて危険であったことから相変わらず海上輸送に頼っていた。しかし、明治28年に硫黄鉱山の発見と開発が急激な人口増加をもたらし、より安全な陸上輸送が求められた。

明治36年に函館～森間の鉄道が開業、大沼駅も併せて開業した。それまではジュンサイ沼付近の開発が主だったが、大沼駅の開業に伴って大沼の開発が一気に進み、とりわけ観光産業への影響が大きくこの頃旅館紅葉館が完成、沼の屋が「大沼だんご」の販売を開始している。

鹿部村から鉄道輸送を求める声

明治37年頃軍川～鹿部温泉間の道路改修も進み、馬車による運搬が主な交通手段となったが、大正時代に入り自動車が取って代わった。しかし、馬車や乗合自動車も走り出したが輸送利用に限度もあって、鹿部村の人々から鉄道輸送を求める声があったことは、極めて当然のことと納得できるものである。

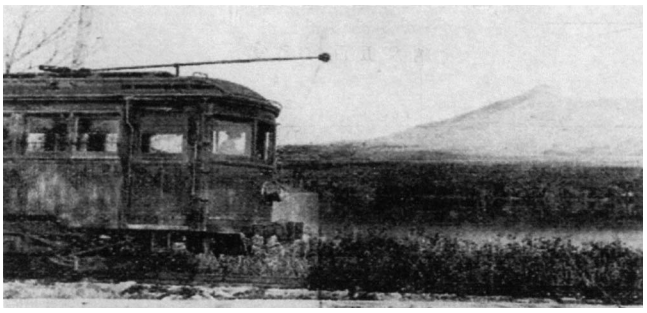
当時、鹿部村で石材採掘を営んでいた伊藤源吉が石材と鮮魚輸送を目的に、大正11年12月軍川～鹿部間を結ぶ渡島軌道の免許を得て着工したものの、関東大震災の影響による不況と資材難、更に資金難に陥り中断されてしまった。その後、資金問題も解決、工事は再開されたが当初計画していた馬車鉄道は時代遅れとなり、大沼電鉄と改名して電車鉄道として観光客の確保も視野に入れ始発駅を軍川駅から大沼駅に、また、当初計画していた馬車鉄道から蒸気鉄道へ、さらに電車鉄道に計画を変更して出願、認可を受けて昭和２年11月に着工する。

大沼電鉄の開業

昭和４年２月、大沼駅～鹿部駅間18㎞が開通。当時の函館日日新聞は「大沼鹿部間の電車軌道全通と共に鹿部以南

昭和４年の鉄道路線図

の漁村の人々は従来船で海路函館方面へ出たが、開通と同時に函館方面へ出る人は陸路電車によって出てくるので、開通以来一日120～130人を下らぬ状態にて当局は予想外の好成績に驚いている…」と報じ、同時に「貨物はまだ鉄道省と連帯運輸の許可が無いが、近く許可に接するから便利になるだろう」と報じている。

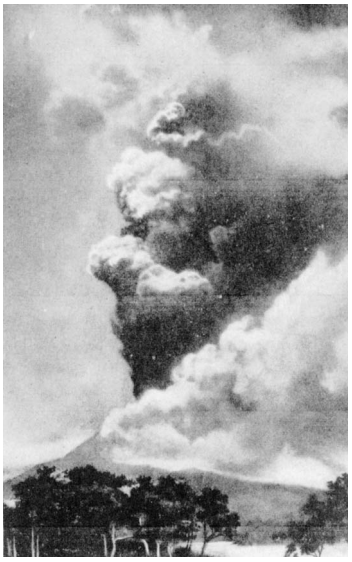


大沼公園湖畔を走る電車

駒ヶ岳の噴火

ところが、開業４ヵ月後の昭和４年６月18日駒ヶ岳噴火により大沼電鉄の軌道が一部噴石で埋まり不通となったが、噴火の日は大沼～銚子口で区間運転をして被災者を運んでいたという記録が残っている。しかし、その後発電所の火災で全線不通となり、２ヵ月間休業を余儀なくされた。

噴火で有名になった鹿部村は、電車の全面開通とともに災害見物の人たちで思いがけない潤いを受けているが電車もそのお陰で予定より５割～10割の増収…（函館毎日新聞）



大沼から眺めた駒ヶ岳の噴火

噴火後の復興が一段落し、その後の駒ヶ岳を見物しようと大いに賑わった。この時期大沼湖畔一周道路の整備や函館から大沼までの自動車道の整備も進み、それらを見込み大沼電鉄は乗合自動車の許可申請を行っている。（函館日日新聞）

大沼電鉄の開通によりそれまで海上輸送だった物資が陸路の貨物輸送になり鹿部村は大いに発展した。しかし、大沼鹿部間の自動車道の開通が大沼電鉄の営業収益に大きな影を落とし始めた。また漁業においては好漁、不漁がそのまま収益に影響し観光客の減少も経営を圧迫した。自らも昭和12年３月に大沼鹿部間のバス事業を開始し（７月には川汲まで延長）順調に収益を上げたが鉄道の収益は上がらず更に第二次世界大戦の開始から国による統制が強化され経営を圧迫した。

大沼電鉄の廃止

昭和20年国鉄は函館本線駒ヶ岳東回り（砂原線）の開通により、一部並行することになった大沼電鉄は不要不急線として６月廃止される。大沼電鉄で活躍した機関車や車両、線路などは供出品として大沼駅に集積され供出される予定であったが、終戦を迎え大沼駅に残された。

大沼電鉄の再興と挫折

国鉄砂原線は開通したが、鹿部市街地から離れていることもあって鹿部村は大沼電鉄に復活を陳情、この陳情を受け大沼電鉄は事業の再開を申請し、昭和21年11月認可される。旧路盤を再利用して工事は順調に行われ昭和23年１月新銚子口駅～鹿部駅間が開通、国鉄からの貨物直輸送も開始されるなど順調に滑り出した。

ところが、通勤客など旅客の減少に加え漁業などの運輸部門も不漁などの影響をまともに受け経営不振となり、また、函館・湯川から噴火湾に抜ける川汲峠を越える山道が完成し、函館バスがその区間の営業を開始、トラックによる輸送も始まるなど大沼電鉄は旅客、貨物の減少で経営回復に至らず、さらに経営改善を目指し大沼観光に力を入れ遊覧船・定期船事業を開始するが全てが裏目に出て経営を圧迫した。

昭和27年、大沼電鉄の再建策として軌道事業の廃止を打ち出すと、鹿部村議会から猛反対があり「廃止反対の決議」が可決された。この決議の採決で反対した議員のリコール請求が提出され、リコール請求された議員が辞職することになったが、大沼電鉄廃止問題の責任を取って当時の村長が辞職するなど鹿部村は大混乱。しかし、昭和28年、大沼電鉄株式会社は解散することとなった。

昭和４年２月に開業にした大沼電鉄は、その４ヶ月後に起きた駒ヶ岳大噴火に見舞われる。最初は短絡的にこれが廃業への原因かと思ったが、調べていくうちに今北海道各地で起きている鉄道路線廃止問題と同じことが当時の大沼電鉄でも起きていたことが解ってきた。大沼電鉄はバス路

昭和７年頃の大沼駅（現在の大沼公園駅）前
右下の建物のそばに何艘かの舟が浮かんでいるが、当時はこの付近まで湖が広がっていたと思われる。また、左上に湾曲した鉄路と車両が見られるが、これが昭和４年に開業した大沼電鉄で、ここを起点に鹿部温泉まで電車が走っていた。

線の導入やリゾート開発もこころみたが、道路網が整備され峠にトンネルが掘られると自動車運送が主流となり、運送業者の自動車業界への移行に抗すべくもなかったのである。

このリポートは、七飯町郷土史研究会の研究発表会で発表したものだが、その際「大沼電鉄に乗ったことがある方…」と尋ねると数人の方が手を挙げ、当時の状況や雰囲気を話してくれたが、乗ったことのない私たちにとっては、話を聞きながら当時に思いを馳せることが出来たものである。

大沼に電車が走っていたのを見たことがない、何処を走っていたかも判らなかったが、ＪＲ函館駅の２階にある本屋で立ち読みして発見した「大沼電鉄」に感動したものです。このリポートを作りながら、もう少し詳しく調べてみたいと思っている。

（参考文献）
尾　崎　　渉　：　大沼電鉄足跡
小　熊　米　雄　：　大沼電鉄
和久田　康　雄　：　日本の市内電車
大沼電鉄発行　：　大沼公園鹿部間電鉄沿線案内
北海道新聞社発行：はこだて写真集
七飯町史、鹿部町史、七飯町資料館・資料
函館新聞、函館日日新聞、函館毎日新聞、
北海道新聞

◆

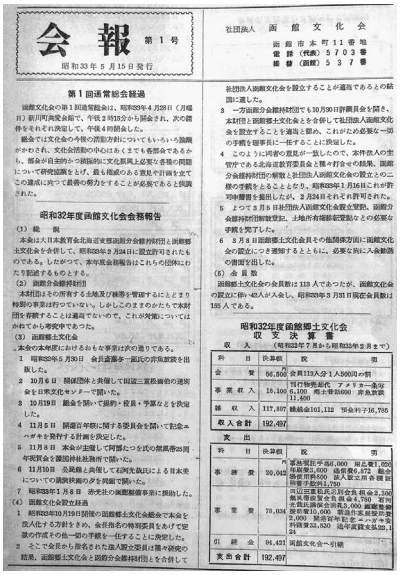
さの　ふみと　昭和20年森町生まれ。昭和40年東京の不動建設㈱に入社、昭和60年同社を退社し七飯町に移住、函館の建設会社に勤務後、現在㈲創造社建設部長。また、平成14年に七飯町議会議員に当選、現在３期目

函館文化会「会報」、80号を迎える

函館文化会「会報」が、今回の発行で節目の80号を迎えました。昭和33年２月24日、前身の「函館郷土文化会」が「大日本教育会北海道支部函館分会維持財団」と統合し、北海道教育委員会から「社団法人函館文化会」の法人設立認可を受け、同年４月28日に第１回通常総会が開催され、総会の経過報告を掲載したＢ５版４ページの函館文化会創刊号が５月15日付で発行された。

「創刊号」では、函館郷土文化会と函館分会維持財団の会務・収支決算報告の他、函館文化会の事業計画が掲載されているが、事業計画には会員がそれぞれ常設の５つの専門部会（総務、教育、芸術、生活文化、郷土美化）に所属して、郷土文化の振興発展上必要な諸方策について研究協議を行うことが明示されている。また、当時の年間収支予算は325千円で、会員は184人、会費は１人500円でした。

会報は、昭和43年まで年間３～４号発行されていたが、昭和44年以降は毎年１回欠かさず発行、この度80号を迎えた。「傘寿」を迎えた函館文化会「会報」ですが、今後も会員皆さんとの橋渡し役として親しまれる「会報」を目指し努力を続けてまいります。ご支援をお願いいたします。



会　報　第１号
昭和33年５月15日発行

社団法人　函館文化会
函館市本町11番地
電話（代表）５７０３番
振替（函館）５３７番

第１回通常総会経過

昭和32年度函館文化会会務報告

昭和32年度函館郷土文化会
収支決算書
（昭和32年７月から昭和33年３月まで）

科目	決算額	説明
会費	56,500	会員113人分１人500円の割
事業収入	18,100	竹行物売収代　アメリカ一般寄付6,100　郷土誌第6600　非鳥放送11,400
雑収入	117,897	繰越金101,112　預金利子16,785
収入合計	192,497	

科目	決算額	説明
事務費	90,048	事務費旅費千円3,000　郵点費1,600　通信費2,600　通信費8,472　備品購入費千円400　法人設立用印鑑登録費千円1,750
事業費	78,036	用以計画費民民公財金負担金3,500　集会用設置費金負担金4,750　若竹光我此講演会謝礼3,000　編纂費費費印費10,000　郷土誌放送印費2,000　郷土誌印刷費一ハガキ実印費35,520　造年度繰越金5,036
引継金	24,413	昭和文化会へ引継
支出合計	192,497	

昭和33年発行
函館文化会「会報」創刊号

平成29年度 函館文化会　事業報告及び収支決算

5月23日に開催されました平成30年度定時総会において、平成29年度函館文化会事業報告及び収支決算が承認されましたので、その内容についてお知らせいたします。なお、事業報告、収支決算等についてのお問い合わせ及びご意見、ご要望がありましたら事務局にお寄せください。

平成29年度 函館文化会事業報告

1　郷土史研究者奨励事業を通じ郷土の文化を顕揚し、その振興を図るため、次の事業を実施した

(1)「神山茂賞」を語る集いの開催
（定款第4条第1号に掲げる事業）
・日　時　　11月7日(月)　午後4時30分
・会　場　　五島軒本店
・第1部　　講　演
「神山茂賞」誕生の経緯について
函館文化会
父・神山茂を語る
神山　茂郎氏（故・神山茂氏次男）
「神山茂賞」を振り返る
安東　璋二氏（神山茂賞選考委員長）
・第2部　　交歓会

(2)　函館文化会講演会の開催
（定款第4条第2号に掲げる事業）
・日　時　　10月14日(土)　午後1時30分
・会　場　　函館市中央図書館　視聴覚ホール
・演　題　　映画の街・函館
・講　師　　菅原　和博　氏
（函館市民映画館シネマアイリス代表）

(3)　第3回「市民公開講座」の開催
（定款第4条第2号に掲げる事業）
・日　時　　9月8日(金)　午前11時00分
・会　場　　函館山ロープウェイ山頂展望台
イベントホール「クレモナ」
・演　題　　生還した料理人　洞爺丸事故を語る
・講　師　　秋保　　榮　氏（元調理師）

(4)　第4回「市民公開講座」の開催
（定款第4条第2号に掲げる事業）
・日　時　　3月30日(火)　午後1時30分
・会　場　　函館市芸術ホール　リハーサル室
・演　題　　箱館・洋楽アラカルト
・講　師　　佐々木　茂　氏
（公益財団法人函館市文化・スポーツ振興財団理事長）

(5)　会報の発行（定款第4条第3号に掲げる事業）
「会報79号」を10月1日発行

2　郷土文化振興のため、文化団体等が実施する事業を後援し、あるいは助成した

(1)　後援事業
（定款第4条第1号・第2号・第4号に掲げる事業）
＊函館朗読紀行　Vol.11－2017
神山茂賞受賞記念「冬の家」より　島崎藤村の妻冬子
函館朗読奉仕会　　7月27日
＊第62回北海道奎星会書道展覧会
北海道奎星会　　8月24日～29日
＊第15回青春海峡文学賞
北海道高等学校文化連盟道南支部文芸専門部　　8月26日
＊古典をたのしむ『今昔物語集の世界に招待』
函館朗読奉仕会　　11月1日
＊第94回赤光社公募美術展
赤光社美術協会　　10月12日～17日
＊「小さな親切」作文コンクール
「小さな親切」運動函館支部　　12月15日
＊2018度日本ユネスコ運動大会in函館
函館ユネスコ協会　　平成30年7月7日～8日
＊函館碧血会「150回忌大法要と記念行事」
函館碧血会　平成30年5月23日～25日
＊北海道150年・E.S.モース来道140年記念
「モースと函館・北海道展」
図書裡会モース倶楽部
平成30年9月28日～10月9日
以上　　9事業

(2)　協賛・助成事業
（定款第4条第1号・第2号・第4号に掲げる事業）
＊第62回北海道奎星会書道展覧会
＊第15回青春海峡文学賞
＊函館朗読奉仕会朗読会函館朗読紀行 Vol.11－2017
＊第94回記念赤光社公募美術展
＊「小さな親切」作文コンクール
＊北海道150年・E.S.モース来道140年記念
「モースと函館・北海道展」
以上　　6事業

3　会　　議

(1)　総　会
ア　定時総会　　5月23日(火)
於：フォーポイントバイシェラトン函館

（議　題）

(ア)　議　案

＊平成28年度事業報告について　承　認

＊平成28年度収支決算及び監査報告について　承　認

(イ)　報　告

＊平成28年度収支補正予算について　了　承

＊平成29年度事業計画について　了　承

＊平成29年度収支予算について　了　承

＊「講演会」の開催について　了　承

(ウ)　卓　話（総会議案審議終了後）

・演　題　講談と落語

・講　師　荒到　夢形　氏（講釈師）

(2)　理事会

ア　第１回理事会　５月23日(火)

於：フォーポイントバイシェラトン函館

（議　題）

(ア)　協議事項

＊平成29年度定期総会提出議案について　承　認

＊神山茂賞顕彰規程の一部改正について　承　認

＊神山茂賞選考委員会委員の選任について　承　認

＊会員の異動（入会・退会）について　承　認

(イ)　報　告

＊「講演会」の開催について　了　承

＊「市民公開講座」の開催について　了　承

イ　第２回理事会　10月４日(火)

於：函館大学会議室

（議　題）

(ア)　協議事項

＊「平成29年神山茂賞」について　承　認

＊“「神山茂賞」を語る集い”の開催について　承　認

＊会員の異動（入会・退会）について　承　認

(イ)　報　告

＊「講演会」について　了　承

＊定款第23条第５項の規定に基づく報告について　了　承

（会長、副会長、常務理事の職務執行状況の報告）

＊今後の日程について　了　承

ウ　第３回理事会　１月30日(火)

於：五島軒本店

（議　題）

(ア)　協議事項

＊平成30年度事業（案）について　承　認

＊会員の異動（加入）について　承　認

＊今後の日程について　承　認

(イ)　報告事項

＊平成29年度事業実施状況について　了　承

＊平成29年度予算執行状況について　了　承

＊第４回「市民公開講座」の開催について　了　承

エ　第４回理事会　３月20日(火)

於：ホテル法華クラブ函館

（議　題）

(ア)　協議事項

＊平成29年度収支補正予算について　承　認

＊平成30年度事業計画について　承　認

＊平成30年度収支予算について　承　認

＊「講演会」について　承　認

＊「卓話」について　承　認

(イ)　報告事項

＊定款第23条第５項の規定に基づく報告について　了　承

（会長、副会長、常務理事の職務執行状況の報告）

＊今後の日程について　了　承

(3)　諸会議

ア　神山茂賞選考委員会

平成29年「神山茂賞」受賞候補者として複数件の推薦があり、８月８日(火)及び９月６日(水)に選考委員会を開催、慎重な審議の結果「受賞該当者なし」として答申することとした。

イ　企画委員会

函館文化会が実施する事業の企画・立案に携わるとともに、その開催・運営にあたっている。本年度の委員会の開催日数はこれまで９回（持ち回り委員会を含む）で、主なる実施・担当した事業は次のとおりである。

・講演会の講師・演題等の協議及び運営

・市民公開講座の講師・講座名等の協議及び運営

・「卓話」の講師・演題等協議及び運営

・「後援名義使用申請」及び「助成金交付申請」の審査

4　そ の 他

(1)　函館文化会ホームページの開設

インターネットの普及により企業・団体等がホームページを持つことが当たり前になっており、函館文化会に対する信頼度を向上して行くには、会員を含めたユーザーの求める情報を常に発信していくことが求められている。

こうした中で、函館文化会の知名度の向上と活動の推進のため、函館文化会の歴史や概要、事業の内容及び案内、報告などの情報を、インターネットを通じて全国・世界に発信することを目的に平成29年４月１日から函館文化会ホームページを開設した。（アドレスは、http://hakodate-bunkakai.com/）

平成29年度　函館文化会　収支計算書

（単位：円）

科目	予算現額	決算額	対予算比	備考
Ⅰ　事業活動収支の部				
1　事業活動収入				
基本財産運用収入	4,753,000	4,853,400	△ 100,400	
会費収入	214,000	218,000	△ 4,000	
事業収入	36,000	36,000	0	
寄付金収入	1,000	0	1,000	
雑収入	12,000	12,921	△ 921	
事業活動収入計	5,016,000	5,120,321	△ 104,321	
2　事業活動支出				
(1) 事業費支出	3,579,000	3,515,131	63,869	
①文化振興事業	2,829,000	2,774,786	54,214	
事務手当	1,374,000	1,374,000	0	
顕彰費	0	0	0	
会議費	405,000	397,640	7,360	
旅費交通費	170,000	163,550	6,450	
通信運搬費	135,000	129,795	5,205	
什器備品費	10,000	0	10,000	
消耗品費	30,000	29,363	637	
修理修繕費	10,000	0	10,000	
印刷製本費	220,000	214,380	5,620	
委託料	10,000	10,000	0	
賃借料	75,000	72,450	2,550	
諸謝金	200,000	200,644	△ 644	
助成金	60,000	60,000	0	
負担金	100,000	99,700	300	
雑費	30,000	23,264	6,736	
②土地賃貸事業	750,000	740,345	9,655	
事務手当	225,000	225,000	0	
通信運搬費	4,000	2,450	1,550	
租税公課	410,000	407,200	2,800	
委託料	49,000	48,720	280	
振替手数料	57,000	55,000	2,000	
雑費	5,000	1,975	3,025	
(2) 管理費支出	1,344,000	1,254,465	89,535	
事務手当	704,000	703,500	500	
会議費	40,000	33,793	6,207	
旅費交通費	70,000	53,890	16,110	
通信運搬費	85,000	79,132	5,868	
什器備品費	10,000	0	10,000	
消耗品費	35,000	27,270	7,730	
修理修繕費	10,000	0	10,000	
印刷製本費	5,000	1,944	3,056	
委託料	150,000	140,400	9,600	
賃借料	185,000	184,420	580	
負担金	10,000	5,000	5,000	
雑費	40,000	25,116	14,884	
3　法人税、住民税及び事業税	440,000	436,500	3,500	
法人税、住民税及び事業税	440,000	436,500	3,500	
事業活動支出計	5,363,000	5,206,096	156,904	
事業活動収支差額	△ 347,000	85,775	△ 261,225	
Ⅱ　投資活動収支の部				
1　投資活動収入				
特定預金取崩収入	200,000	200,000	0	
神山茂顕彰積立金取崩収入	100,000	100,000	0	
郷土資料等整備積立金取崩収入	100,000	100,000	0	
特定預金借受収入	300,000	300,000	0	
郷土資料等整備積立金借受収入	300,000	300,000	0	
投資活動収入計	500,000	500,000	0	
2　投資活動支出				
特定預金繰入支出	200,000	200,000	0	
郷土資料等整備積立金繰入支出	200,000	200,000	0	
特定預金返済支出	300,000	300,000	0	
郷土資料等整備積立金返済支出	300,000	300,000	0	
投資活動支出計	500,000	500,000	0	
投資活動収支差額	0	0	0	
Ⅲ　予備費支出	50,000	0	50,000	
当期収支差額	△ 297,000	△ 85,775	△ 211,225	
前期繰越収支差額	582,375	582,375	0	
次期繰越収支差額	285,375	496,600	△ 211,225	

〈注記事項〉

- 「予算現額」は、第４回理事会（平成30年３月20日）で議決した収支補正予算後の額
- 投資活動収支の部　特定預金取崩収入は、次のとおりである。「神山茂顕彰積立金取崩収入」は、「同積立金のうち 100,000円」を取崩し、「事業活動収支の部事業活動支出 事業費支出 文化振興事業　神山茂賞を語る集い関係経費に 100,000円」を「郷土資料等整備積立金取崩収入」は、「同積立金のうち 100,000円」を取崩し、「事業活動収支の部事業活動支出 事業費支出 文化振興事業会報発行等経費に充てたものである。
- 投資活動収支の部　特定預金繰入支出は、次のとおりである。「郷土資料等整備積立金繰入支出」は、財政調整資金として200,000円を、積み立てるものである。

一般社団法人　函館文化会　会員

（平成30年10月１日現在）

（ア）
秋保　榮
東　伸江
厚谷　享子

（イ）
五百川　忠
池上　信廣
池見　厚一
石井　直樹
石田　恒彦
伊藤　皋
今井　由治
今泉　香織

（ウ）
上田　昌昭

（エ）
繪面　和子
遠藤　正夫

（オ）
近江　茂樹
近江　幸雄
大瀧　俊征
大槻　継也
岡田　弘子
小笠原　金哉
小笠原　孝
小笠原　愈
沖野　信治
小熊　庸介
小山内　武弘
落合　治彦
落合　良治
小野沢　猛史
小原　幸男

（カ）
貝森　とも子
葛西　善一郎
梶原　佑倖
加藤　清郎
加藤　栄子
金山　正智
金澤　俊司
叶　邦武
叶　加奈子
蒲生　ひさ子

（キ）
北原　善通
杵屋　勝幸恵
木村　拓美
木村　裕俊

（ク）
工藤　亜也子

（コ）
荒到　夢形
小林　明
小林　裕幸
駒井　惇助
小柳　辰夫
今　千尋
近谷　忠衛

（サ）
齊藤　修三
櫻井　健治
櫻井　拓郎
佐々木　馨
佐々木　茂
佐々木　俊克
笹原　志郎
佐藤　公郎
里見　泰彦
佐野　史人
澤田　美千

（シ）
塩澤　伸江
島津　彰

（ス）
末永　玲子
菅野　剛造
須藤　由司
澄　信一

（タ）
田井中　和子
平　昭世
髙市　道也
高田　達也
高橋　勇
高村　昭三
田島　郁夫
田島　幸子
太刀川　善一
辰村　和子
種田　貴司
田村　志朗

（チ）
近野　功
千葉　軒岳

（ツ）
辻　喜久子
土家　康宏
坪山　元彦

（ト）
富田　秀嗣

（ナ）
中尾　仁彦
中野　晋
中野　達弥
中村　幸平
中村　朝山
夏井　紀男

（ニ）
西澤　勝郎
西谷　文子
丹羽　秀人

（ネ）
根津　静江

（ノ）
能登谷　公
信田　利之
野又　肇

（ハ）
橋田　恭一
浜谷内　節子

（ヒ）
平野　利明
平原　康宏

（フ）
福原　至
藤井　方雄
藤井　良江
藤田　光
札内　征男
船矢　美幸
古野　柳太郎

（マ）
松崎　満洲夫
松崎　水穂
松村　隆
松谷　勇
丸藤　競

（ミ）
三浦　稔
宮崎　昌

（ム）
向出　悦子
向出　清治
棟方　次郎
村上　英彦

（モ）
毛利　悦子

（ヤ）
安島　進
山田　涼子
山那　順一
山本　真也

（ヨ）
横井　由利子

（ワ）
若柳　英美代
若松　幸弘
若山　直
渡邉　兼一
渡利　正義

（以上１３２名）

編集後記

◇函館文化会「会報」第80号をお届けします。記念すべき第80号としての企画も考えたのですが、アイデアも浮かばず昭和33年発行の「創刊号」を紐解くのみとなってしまいました。（38ページ参照）しかし、当時の熱心な活動の一環に触れることが出来、先人たちの努力を無駄にしないよう頑張る気概を頂戴できたかと思います。「会報」第80号、ご一読いただきましたらご意見・ご感想をお寄せください。

◇今年は「神山茂賞」制定30年となります。昨年開催の“「神山茂賞」を語る集い”の編集作業にあたり、「これまで受賞者の事績紹介」や「神山茂氏プロフィール」と制定30年のミニ特集とすることができました。これを機に「より市民に親しまれる、神山茂賞」を目指して参ります。

◇特集「函館の歴史と文化を語り継ぐ」…。第３回のテーマ「大門・松風町」に７人の会員皆さんから想いやエピソードをお寄せいただき、当時の賑わいを想い呼び戻され懐かしく感じられました。ただ懐かしがっているだけでは駄目なんだろうけど、あの賑わいは後世に伝えていきたいものです。

◇会員の佐野史人氏から「大沼電鉄物語」の寄稿をいただき、その存在すら知らなかっただけに興味深く読ませてもらいました。いま、大沼湖畔をチンチン電車が走っていたら…、ふと考えてしまいました。これからも、郷土にまつわる歴史や文化に関わる皆さんからの投稿をお待ちしております。

◇本日現在の会員数は132名、昨年より20名ほど増えました。単に数が多ければよいということではありませんが、函館文化会の活動に賛同いただける方を一人でも多くという思いです。引き続き会員増強にお力添えをお願いいたします。

（編集子）